STRANGE FOLK

KULA SHAKER
FANZINE

ISSUE No. 11
NOV 2016

20th Anniversary SPECIAL EDITION

K20周年記念 特別版

KULA SHAKER
徹底インタビュー

『K』時代 回顧録
バンドを支えた仲間たち

全ギググラフィー

秘蔵フォト・アーカイブ

・・・・さらなる魅力満載！

Contents

2 目次
3 はじめに
4 K20周年記念：Kula Shaker 徹底インタビュー
18 ヘンリー・バワーズ=ブロードベントが語る Kula Shaker『K』とライブ
20 カバーアートの舞台裏：デイヴ・ギボンズ インタビュー
22 『K』ディスコグラフィー ～全アルバム&シングル一覧～
24 バンド秘蔵フォト・アーカイブ
26 仲間たちが語る『K』時代 回顧録
28 マトゥラ・ダス インタビュー（インタビュアー：Andrea Zachrau）
33 KULASEKHARA（クラセカラ）王は何者なのか？（文：Daiane Hemerich）
34 サイモン・ロバーツ インタビュー（インタビュアー：Andrea Zachrau）
36 グラハム・パティソン インタビュー（インタビュアー：Mary Nilsson）
38 偉大なるクーラ・シェイカー（文：Albert Calderon）
40 フル・ギグ年表：1993～2016年 全ライブ日程
46 『K』記念ボックスセット《KOMPENDIUM》のすべて
47 ファンアート（作品：Peter Bruce）

STRANGE FOLK - KULA SHAKER FANZINE
クーラ・シェイカー公式ファンジン
（奇妙でクレイジーに2006年創刊）

ファンジンチーム
編　　集：Andrea Zachrau
デザイン：Anni Kotisalo
テキスト：Mary Nilsson
校　　正：Mary Nilsson, Mike Bray
Daiane Hemerich and Dodge
表紙写真：Andrea Zachrau
アートワーク：Peter Bruce

特別協力：
Maurice（多大な協力と忍耐に感謝）、Simon（写真提供）、Crispian（調査協力）、YumiK（日本語訳）、そして本号に参加してくれたすべてのファンの皆さんに感謝！

Strange Folk Fanzine（ストレンジ・フォーク・ファンジン）は、kulashakerzine.com にて公開しています。

Facebook や**インスタ**でも最新情報を発信中！
facebook.com/kulashaker.fanzine
instagram.com/kulashakerzine (@kulashakerzine)

※本書では、英語の人名や地名を読みやすくするため、英語表記（カタカナ併記）または、カタカナもしくは英語表記のみで記載している場合があります。実際の発音とは異なる場合がありますのでご了承ください。正確な綴りは英語版をご参照ください。

親愛なるストレンジ・フォークスへ

本当に信じられません！あれからもう20年も経ったなんて。クーラ・シェイカーを初めて耳にしてから20年、『K』がリリースされてから20年、そしてこのクレイジーな旅が始まってから20年。

正直なところ、この20年はバンドにとってだけでなく、私たち熱心なファンにとっても、実に山あり谷ありでした。
それでも、どうやら私たちは皆、生き抜いてきたようです！それって本当にすごいことです。
特に、今この狂った世界で直面している状況を思えば、なおさら。でも、今年世界中で何が起ころうとも、
いつもそばには安らぎと希望とインスピレーションが待っていてくれました――Kula Shakerが帰ってきたのです。
これまで以上にパワフルになって。たくさんの新曲とライブを携えて、私たちを祝福してくれています。

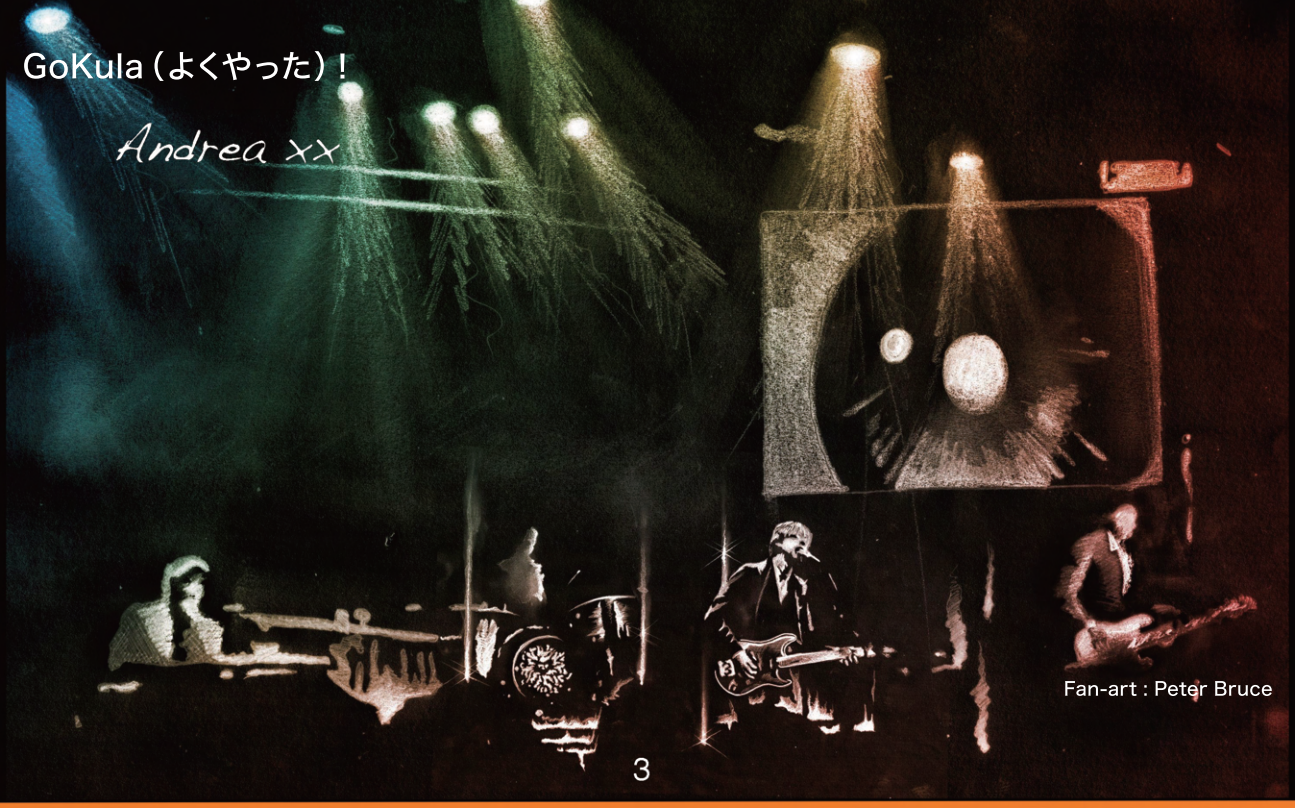
正直、長年ファンとしてバンドの浮き沈みを経験してきた私は、彼らがまた解散してしまうのではないか
という不安を、どこかで抱くようになってしまいました。
今年彼らが戻ってきたときも、私は「もう二度と会えないんじゃないかと思ってた」って感じで、
誰かが「これから数ヶ月、あれこれ計画があるんだ」と言うたびに、「わかった、本当実現するか見てみよう」という
気持ちで聞いていました。ある意味、あまり期待しすぎないようにしていたのかもしれません。
もしあなたも私と同じくらい熱心なファンなら、またいつ終わってしまうかと思うと、本当に怖いですよね。
でも一方で、私も少し賢くなったので、彼らが私たちに届けてくれる音楽や、参加できたライブ、
そのすべてに感謝すること、そして、焦らず待つことを学びました。
今年は私たちが望んでいた以上の素晴らしい年で、クーラ・シェイカーのファンにとって、
あらゆる意味で夢が叶ったような年でした。

そう考えると、この記念ファンジンの刊行はまさにタイムリーなものでした。
バンドへのトリビュートであると同時に、バンドの歴史を紐解く歴史的要約でもあります。
この号には素晴らしいインタビューや記事がいくつか掲載できたので、『STRANGE FOLK 11』は
ファンジン制作スタッフ全員にとって、まさに宝物のような存在です。
Maryと私がこの数週間にわたって行ったインタビューは、興味深いだけでなく、
インスピレーションに満ち、時に魔法のようでもありました。
皆さんにも、私たちと同じように楽しんでいただければ幸いです！

最後に一言。「スペシャルK」ツアーを楽しんでください！
Kula Shakerの未来がどうなるかは分かりませんが、息を呑んで待ちましょう。いつもどおりに！

GoKula（よくやった）！

Andrea xx



Fan-art : Peter Bruce

“Kは、唯一無二の不思議な存在だ”

記念号には特別なインタビューがふさわしい。
バンドは時間を取って私たちと対談し、『K』時代に何が起きたのか、「K20ツアー」の計画、
そして、Kula Shakerの未来について語ってくれた。

by Andrea Zachrau, Anni Kotisalo & Mary Nilsson

Photo : Andrea Zachrau

“僕たちは一周してまた原点に戻ってきた。
それができたのは、素晴らしいファン
みんなの応援のおかげだ。”
— CRISPIAN

Photo : Andrea Zachrau

「すべてのことには理由があって、大きな決断には正しいタイミングを選ぶことが大切だ」と以前言っていましたが、そうした意味で、今年のアニバーサリー準備期間中に特別な日などはありましたか？

CRISPIAN: 僕たちは20周年についてはとてもリラックスした姿勢で臨んでいたんだ。でもそれは同時に、スタジオに戻ってまたライブをする絶好のタイミングだった。まるで大きなネオンサインが「今だ！」って光ってるような感じだったよ。この節目をちゃんと記念したかったし、自分たちがどれだけ進んできたのか、そして何とか生き延びて、今もバンドを続けていられるってことを認めるのは大事だった――まあ、アルバム制作のペースに関して言えば、僕たちはかなり怠け者なバンドだけどね（笑）。

いくつか「縁起のいい」タイミングがあったけど、それらのほとんどは偶然だった。たとえば、最初のアルバムの映像クリップのリリースと日蝕が重なったことがあって、それで「eCLIPse」ってタイトルにしたんだ。こういう天体の動きとかは、たいてい偶然なんだけどね。

僕はずっと天文学とか占星術、月の満ち欠けなんかに興味があって、何年も勉強してきたから、今ではもう外出前に天気をチェックするみたいな感覚になってる。
マネージャーのモーリスも最近は楽しんでるみたいで、いつも「今はいい時期かな？縁起がいいかな？今やるべき？」なんて聞いてくる。多分、半分は冗談だろうけど（笑）。

面白いのは、正しい心構えで正しいことをしている人は、自然と良いタイミングに行動していることが多い。タイミングと調和してるんだ。逆に、自分の意志を無理に押し通そうとしてる人、特に自己中心的に動いている人は、物事のバランスが取れていない。そういう人は、たいてい自分にとってよくない「ひどい」タイミングで大きな決断をしようとする。周囲の人や自然、時間と調和していないんだよ。そういうことを考えるのは興味深いし、楽しいよ。

『K』がリリースされた年と『K 2.0』が出た今年とを比べて、バンドとしての活動や、メディア・ファンの反応にはどんな違いがありましたか？

CRISPIAN: 『K』が1996年にリリースされたとき、ちょうど“ポップ・ミュージック”が爆発的に盛り上がっていた時期で、バンドとしても一気に火がついたんだ。
ブリットポップは特にライブに重きを置いていて、若いバンドたちはクラシックなロックンロールの雰囲気を真似してた。今振り返ってみると、実はOasisみたいなバンドとは、思っていた以上に共通点があったと思う。彼らは本気で「俺たちはロックンロール・バンドだ」っていう意識を持っていた。でも当時は「僕らは似てる、魂の兄弟だ」なんて思ったことは一度もなかったけどね。
でも今はまったく別の世界。ネットでの話題性とか、シンガーソングライターや『Pop Idol』『Xファクター』みたいな番組から出てくる“早く有名になろう”っていう文化が主流になってる。あの頃とはまるで違う宇宙にいるみたい。

僕らは一周して、また原点に戻ってきた。完全な独立するまでに20年かかった。そして、僕らがそれを実現できたのは、ひとえにファンのみんなの驚くほど素晴らしい応援のおかげなんだ。

PAUL： メディアについては、当時もあまり気にしてなかったし、今はさらに気にしてないからコメントしようがないな。
ファンの反応についてはね…当時は本当にワクワクしたけど、同時にめちゃくちゃ怖くもあった。たぶんあの頃は、こっちも神経質になってたんだと思う。有名になるって、ちょっと頭がクラクラするような体験だし、プレッシャーもあった。『K』のレコーディングも、ライブもね。
トップに向かっていく途中の、小さな会場でのライブは最高だったけど、『K』がリリースされて、チケットが完売するようになってからは、もう不安で仕方なかった。

本当に緊張しすぎて、しょっちゅう吐いてたしね。クリスピアンはそうじゃなかったけど、俺は完全にやられてた。だから今は、その状態を乗り越えられて、本当にありがたいよ。
もう今は、あんな風に神経や体調を崩さずに、ただステージに立てる。ジジイになってからまたそこに戻ってきて、しっくりくるっていうのが最高なんだ。まるで自分の居場所に帰ってきたようで、すごく落ち着ける。そういう感覚が、たまらなく好きなんだ。

ALONZA： 昔の音源を聴き返すと、僕たちには本当にすごいエネルギーがあったなって思うよ。
あの頃の僕は、曲に必要以上にたくさんの音を詰め込んで演奏してたと思う（笑）。でもまあ、“節度ある演奏”っていうのも、やりすぎると本当に退屈になってしまう場合もあるしね。僕たちが上達したと思いたいけど…どうかな、正直あまり自信はない（笑）。自分の話だけどね。
ポールは確実に上手くなった。今では本当にとんでもないプレイヤーだよ。僕はある時点で練習をやめちゃったけど、ポールはキャリアのピークを迎えた後に、本格的に練習を始めたんだ。そこからがスタートだった。
今では、完全に“練習オタク”になってるよ（笑）。

「Tattva」や特に「Govinda」のような曲が、人々に特別な影響を与えていると感じますか？サンスクリット語の歌詞を観客が一緒に唱えているのを見ると、どんな気持ちになりますか？

“ジジイになってまた戻ってきて、しっくりくるのが最高なんだ。まるで自分の居場所に帰ってきたようで、すごく落ち着ける。それがたまらなく好きなんだ。”
— PAUL

Photo : Andrea Zachrau

CRISPIAN： 名前を出して自慢するつもりはないけど…スティング（チャリン！）がライブに来たことがあったんだ。彼はサンスクリットやマントラ、ヨガにすごく興味があるんだよね。それで「君たちはどうしてサンスクリット語を知ってるんだ？すごいね、ポップバンドなのにこんなことやってるなんて！」って。
僕は「いや、サンスクリットを“知ってる”なんて言えるレベルじゃないよ。話せないし書けないけど、いくつかの歌を知ってて、その“魔法”を敬意を持って扱ってるだけなんだ」って返したんだ。そしたら彼が「それが大事なんだ。全部を正確に理解している必要はない。ただ、それが意識に与える影響を実感できることが大事なんだ。それは、自分自身の直接的な体験を通して分かることだからね」って言ったんだよ。

でも、それこそが“音楽そのものの魔法”だと思う。音楽は、心と心をつなぐんだ。
ジョニー・キャッシュが駅を出る列車の歌を歌っていたとしても、僕らが感じるのは、ただその情景じゃなくて――もっと深い「彼そのもの」だよね。

「Govinda」を演奏していて、まるで自分たちじゃなくて“何か別の力”が観客全体を支配しているように感じた、そんな素晴らしい体験を何度かしたことがある。
昔、ランカシャーのブラックバーンでの大規模なライブでは、会場が満員で、酔っ払った男たちが手を空に上げて、目を閉じて、笑顔で「Govinda」を一緒に歌っていたんだ。音楽がまるで独自の生命を持っているかのようで、超現実的で素晴らしい瞬間だった。
そんな時は、自分も観客と同じように「ライブを観ている」感覚になるんだ。

PAUL: 特別な「ヴァイブ（雰囲気）」があるって言えるかもしれないけど、同時に、“エキゾチックで秘教的な哲学”をロックバンドが届けてるっていうのも、かなり変わってるよね（笑）。
もしかしたら、俺は観客と同じくらい何もわかってないかもしれない。だから、みんな同じ船に乗っているっていう感覚があって、それが一体感を生む。「何かが起きてる」っていう感覚を信じてるんだ。
たしか誰か── マイルス・デイヴィスだったと思うけど「音楽について語れば語るほど、その本質から遠ざかる」って言ってたんだ。ジャーナリストは言葉にしないといけないけど、言葉にするほど、表現したいことから離れていってしまうんだよね。

あなたの音楽で人々が最も魅了されるのはどんなところだと思いますか？

CRISPIAN: 自分のバンドやライブを客観的に見るのは難しいけど、多くの人が「バンドの“スピリット”に共感する」と言ってくれるんだ。それが前向きで、ポジティブで、スピリチュアルなインスピレーションが本物だって感じるみたいで、それでいて楽しいってね。僕が受け取る印象も、まさにそんな感じなんだ。

ブリットポップを振り返ると、『K』がシーンに現れたのは完全に“事故”だったってことがよく分かる。完全に異質だった。当時の流れとは“真逆”みたいな存在だった。だからこそ、強いインパクトがあったし、すごく際立っていたのかもしれない。
とはいえ、『K』が“時代遅れ”になったとは感じてない。むしろ、驚くほど時の試練に耐えてきたアルバムだと思う。それに僕らのライブパフォーマンスは、今が一番音がいいし、新鮮に感じてる。それがちょっと不思議なんだよ。だって僕らとしては、そろそろ年をとって、魔法を失ってる頃だと思ってたからね（笑）。

“「Govinda」を演奏していて、観客全体が何かに取りつかれたような、そんな素晴らしい体験が何度かあったんだ。”
— CRISPIAN

Photo : Andrea Zachrau

“The Whoには完全に打ちのめされた。特にピート・タウンゼントはまるで電気そのもので雷を操ってるようだった!”
— CRISPIAN

Photo : Andrea Zachrau

でも、決して衰えないバンドも確かに存在するし、むしろどんどん良くなっていくバンドもある。10年くらい前、ジョン・エントウィッスルが亡くなる直前に、シェパーズ・ブッシュ・エンパイアでやった超小規模なウォームアップ・ギグでThe Whoを観たんだけど、正直何の期待もしてなかったんだ。だってもう年取ったバンドだし、かつてのエネルギーなんかないだろうって思ってた。

でも、完全に打ちのめされた。単にまだ最高のロックンロール・バンドだったってだけじゃなくて、特にピート・タウンゼントは完全に電気そのもの、雷を操ってるみただった！それって、すべてが内側から来てるってことなんだ。彼は自分の“魂”とちゃんとつながってる。だから老いない。今でも若々しくて、今でも完全にイカれてる！
本当に興奮したよ。今の若いバンドで、年金暮らしのピート・タウンゼントに少しでも迫るやつを見たことがない。でも考えてみれば、彼がそのお手本を書いたんだから当然かもね。

ALONZA: 今年はたくさんの人と話したんだけど、「人生のどん底を乗り越える手助けになった」とか「精神的にきつかったときに救われた」って言ってくれたんだ。音楽が支えてくれた、すべては“愛”なんだって。そんなふうに言ってくれる。それってすごくうれしい。でもそれは、この音楽の一面に過ぎないんだ…。

それから、僕たちは昔から“ぶっ飛んだ”人たちを引き寄せるんだよね…君も含めてね（笑）。
でも、それは良い意味でね。
このイカれた世界の中では、ほんとに一緒にいたいのは、いわゆる“クレイジー”な人たちなんだ。友だちになるなら、そっちの人たちだよね？ いわゆる“まとも”とされてる世界の方が、よっぽど怖いし狂ってる。だったら、その世界で“クレイジー”だと思われる方がずっとマシ。
だから、Kula Shakerのファンに関して言えば、クレイジーな人達大歓迎！（笑）

PAUL: 名前は出さないけど、ここ数年見たアーティストの中には、全然ワクワクしないものも多かった。僕がワクワクする前に何マイルも手前で止まっちゃってる感じ（笑）。
でも「Bucky」と俺たちは違う。ステージの最初から最後まで、本当にワクワクするんだ。音楽が興奮してれば、人も自然に興奮する。ロックンロールのライブに金を払って観に行くんなら、心をぶち抜くような興奮の“一撃”を喰らわせてくれなきゃ意味がない。

**“「普通の世界」が実は
すごく怖くて狂っていると気づいた時、
その中で「クレイジーでいる」というのは、
むしろ良いことなんだ。”
— ALONZA**

Photo : Andrea Zachrau

インドを訪れた際の、最も大切な思い出は何ですか？そしてそれが Kula Shaker の音楽にどのように影響を与えたと思いますか？

CRISPIAN： インドへの旅自体がバンドを形作ったわけじゃないんだ。その旅は、僕たちが10代後半から20代初めにかけて体験した、非常に濃密で変容的な時期の一部だった。
その時期って、ちょうど大人の世界に直面するタイミングだよね。家を出て、自分自身で世界と向き合い始める瞬間――その最初の発見が、僕にとっては本当に魔法のような時間だった。そして運良く、その経験を音楽という形で表現する手段があった。

インドへの旅は、言うならば「川の源流を訪ねるようなもの」で、もっと長い旅路の一部だったんだと思う。
その体験をバンドに持ち帰って、人々と共有してつながることができたのはすごくワクワクすることだった。

“すべてが一瞬で過ぎ去って、記憶が曖昧なんだ。”
― CRISPIAN

Photo : Andrea Zachrau

それをメインストリームのメディアに乗せていくというのは、大きなチャレンジだった。本当にワクワクする、でも同時に不可能に近いようなミッションだった。
あの時期の思い出は本当に宝物だよ。みんな一緒に住んでいて、まだ子どもみたいだった。
無知で、純粋で、インスピレーションに満ちていて、ちょうどその頃、ジョー（今の奥さん）とも付き合い始めたところだった。まだ結婚はしてなかったけど、やっぱり「恋に落ちたばかりの高揚感」ってやつには、何にも勝てない！

ああいう時期に、もがき苦しんでいたっていうのが、逆に良かったんだと思う。本当に、がむしゃらだった。自分たちの力だけでギグをやって、プロとしてやっていこうともがいてて。でも、仲間がいたから、一人で疑心暗鬼になるようなことはなかった。お互いに励まし合って、背中を押し合ってたんだ。
“The Kays”という名前のままで3年間くらい全く進展がなかったけど、その間にも色んなことがあった。そしてバンド名を“Kula Shaker”に変えたら、すべてがかみ合い始めた。あれは、本当に素晴らしい時間だった。

『K』をリリースするまではすごく順調だった――でも、そこからが大変だった。僕たちは“ビジネス側”の人間に責任を問われる立場になったんだ。

『K』は思い通りに仕上がらなかったと以前言っていましたが、今あらためて聴いてみてどう感じますか？

CRISPIAN： 今だったら、もっと違う作り方をすると思う。でも、うまくいった部分もたくさんあるよ。
「Magic Theatre」や「Jerry」みたいな音の風景を描くような曲は、本当に満足してるし、それは全てジョン・レッキーの手腕だった。ただ、もっと生々しいロックンロールの演奏になるはずだった部分は、スタジオでは力が入りすぎてうまく“力が抜けた”演奏ができなかった。

でも、ファースト・アルバムってのは、常に学びの場なんだよ。それに『K』はあまり時代遅れな感じがしないし、90年代の典型的なアルバムという感じでもない。
『K』はちょっと唯一無二の不思議な存在で、それが逆に救いでもある。

『K』リリース当時、一番印象に残っているライブやイベントは何ですか？

CRISPIAN： “The Presidents Of The United States Of America”とのツアーがすごく楽しかった。バンド同士の仲も良かったし、大規模な会場での演奏も楽しんでた。ニューヨークでの初ライブも最高だったし、ロンドンのアストリアで初のヘッドライナーを務めたときも、自分たちにとって大きな出来事だった。

でも、あの頃はあまりにもすべてが一瞬で過ぎ去って、正直、記憶が曖昧なんだ。グラストンベリーですら、一番覚えてるのは…泥だらけだったってことだし（笑）。
自分たちが完全に独立してからのライブのほうが、ずっと満足度は高いよ。
初期のあの頃っていうのは、よくある話で、急に成功した若いバンドが直面する典型的な状況だった。
気づいたら自分たちが“音楽”に導かれてるんじゃなくて、“機械”に押し出されてるような感覚になるんだ。
それってほんとうにゾッとすることなんだよ。だから、なんとかそこから抜け出す方法を探そうとするんだ。

ALONZA： うーん、思い出が多すぎて迷うけど… グラストンベリーでヘッドライナーを務めたのはすごかったね。だってそれまでは、グラストンベリー周辺で何度もライブをやってたし、フェスの中に勝手に潜り込んで、小さなテントで演奏したことすらあったからね（笑）。だから、大ステージで演奏できたっていうのは、僕たちにとって大きな意味があったんだ。

でも、フェスっていうのは、理想通りの完璧なギグにはなりにくいんだよ。ステージを降りて「今のサウンドは最高だった！」って心から思える瞬間は、あんまりない。
もちろん、そこに参加できること自体は素晴らしいし、光栄なんだけど、現場では技術的なトラブルやらなにやら、いろんな問題と格闘しなきゃならないからね。

CRISPIAN: 当時のツアーで最高だったのは、『K』と『Peasants』の間にやった“Revolution for Fun”ツアーだったと思う。音楽も演出もすべてがかみ合って、まるで自分たちの人生をほんの一瞬でも取り戻したような感覚があった。悩みなんて全部置いて、ただひたすら演奏することだけに集中できたんだ。最高のツアーだったよ。

ALONZA: それは本当にいいツアーだった。でも、個人的には一番印象的だったのは、たぶん『K』がリリースされる直前の頃かな。ようやくお客さんがライブに来てくれるようになって「あ、ちゃんと見に来てくれてる」って実感できた時期だった。
覚えてるのは、“York Fibbers”っていうパブでライブをやったときのこと。ちょうどテレビ番組『ザ・ホワイト・ルーム』に出た直後だったんだけど、いつも通りその小さなパブで演奏してたら、突然めちゃくちゃ混んでたんだ。
「え、マジかよ…！」って思った。店の外にまで人が溢れて、入れない人までいたんだ。テレビに出たってだけで、あれは本当にクレイジーだったね。

PAUL: グラストンベリーに出た時のことはよく覚えてる。でも、正直あのイベント自体にはちょっとガッカリだった。演奏はいつも通り、ちゃんとやれたと思うし、悪くなかったんだけど…でも終わった後、「あぁ、これが俺たちのロックンロール・ドリームの頂点だ！」みたいな感慨はまったくなかった。実際には、雨の中、干し草の山の後ろで親たちと一緒に突っ立ってた。“ロックンロールの絶頂”が、実際には“親と一緒に土砂降りの中で過ごす”だったんだ（笑）。

『K』時代のライブって、「これが特別な瞬間だ！」って感じるものはあまりなかった。とにかく働きまくってたって感じかな。大きな会場でのギグもやったけど、「これはスゴかった！」って記憶に残ってるのは正直あんまりない。

でも、自分がずっと聴いてきたアーティストと共演できたのは感慨深いよ。ジョーン・アーマトレイディングとかエアロスミスとか。グラストンベリーでゴメズと同じステージに立った年もあって、あれは楽しかった。スティーヴィー・ワンダーやボウイ、ロジャー・ウォーターズと同じステージに立てたって思うと、“自分は生きてたんだ”って後から実感できるんだ。

『K』時代のお気に入りの旅物語は？

CRISPIAN: サンセット・ストリップのハイアットでリトル・リチャードにばったり会った時のことは、マジで衝撃だったよ。リトル・リチャードに会うって、もう神に会うようなもんだから。文字通り、彼がいなかったらロックンロールそのものが存在してなかったわけだから。世界にロックンロールがなかったら？それはもう“虚無”だよ。

で、彼がロビーに現れたんだけど、見た目は「リトル・リチャードのコスプレをしたおばあちゃん」みたいなんだ。でっかいカツラにバッチリメイクで。
彼はポールに何かスピリチュアルな可能性を感じたんだろうね。アシスタントを通じて、イエスについての本を渡してきたんだ（笑）。

それから、ナッシュビルやメンフィス、ニューオーリンズといった街でプレイできたのも大きな経験だった。僕たちはそれまで、そういう街に行ったことがなかったから、そこでライブができたのは本当に特別だったよ。まさに“音楽の聖地”みたいな場所だからね。

ナッシュビルに飛行機で着いて、まず最初にやったのは、もちろんまともなベジタリアン・カフェを探すことだったんだけど――（笑）。
なんと、スープを頼もうと並んでいたら、僕たちの目の前にいたのがジョーン・バエズだったんだ。もう、びっくりしたよ。かなり感動した。彼女、紫のカウボーイブーツを履いてて、美術の先生みたいな雰囲気だったな。

ALONZA: そういえば、あれはニューヨークからローマに飛んだときだったかな。すごく長い移動で、時差ボケもひどくて、ようやくホテルに着いたと思ったら、最初に起こったのが、ポーリー（ポール）と二人でエレベーターに閉じ込められたっていう事件（笑）。

エレベーターは30cmくらい動いたあと、急に止まっちゃって。そしたらポーリーが「出してくれ！出してくれ！俺、閉所恐怖症なんだよ！」って叫び始めたかと思ったら、しまいにはその場で用を足そうとしはじめて…その時点でこっちもパニックになって、「出してくれー！」って一緒に叫び始めた（笑）。
結局どうやったのか分からないけど、二人でドアを蹴りまくってこじ開けることに成功したんだ。外にいた人たちは「お願いだからやめて！こっちで助けるから！」って叫んでたけどね（笑）。それ以来、たとえ5階でも絶対に階段を使うことにしたんだ。

PAUL: 『K』期の終盤に、俺たちはソニー／コロンビアのプロモーションの一環として、ローリン・ヒルとかフージーズとたくさんのライブに出てたんだ。よく同じ飛行機に乗ってたし、『Top of the Pops』にも彼らと一緒に出た。たしか2回くらいかな。フェスにも一緒に出たり、いろんな場面があったよ。

それで、あるときニューヨークで、彼らがバトルシップ（軍艦）で開いたパーティに招かれて参加したんだけど、それがまたすごかった。
一度、彼らのライブをステージの脇から観ていたんだけど、演奏が始まっているのにローリン・ヒルがステージにいないんだ。それなのに、どこからか彼女の歌声だけが聞こえてくる。突然、背後に誰かの存在を感じて、振り返ったら――彼女が真後ろで歌ってたんだよ。まるで天使のような声で。彼女はかなりお腹が大きくて妊娠中だったのに、完全に俺が道ふさいでたんだよね。
それで、「やべ、どいてあげなきゃ！」って思って、どうにか彼女の“お腹”を邪魔しないように動こうとしたんだけど、ステージ裏って狭いし、イギリス人特有の“気まずい礼儀正しさ”が発動して、かえって状況をややこしくしてたんだ（笑）。

ローリン・ヒルの『Miseducation of Lauryn Hill』というアルバムが大好きなんだ。俺のギター・ヒーローのフランシス・ダナリーがギター弾いてるんだ。
彼は “It Bites”というカンブリア出身のプログレ・バンドで演奏してたんだよね。

**“時差ボケでフラフラのまま
ローマのホテルに着いたら、
いきなりポーリーと二人で
エレベーターに閉じ込められた。”
— ALONZA**

Photo : Simon Roberts

バンド結成時、Don Pecker（ドン・ペッカー）はどんな役割を果たしていたんですか？

CRISPIAN: 彼はイカれたおじいちゃんと道化師の中間みたいな存在だったよ。どんな相手でも、どんな状況でも笑わせてしまう、天性の才能があるんだ。
そういう人って、他の誰にも言えないような真実をサラッと言えてしまうよね。彼はいつも僕たちを信じてくれてた。「そのうちお前らは、便所でのんびりするヒマすらなくなるぞ」なんてよく言ってた（笑）。すごく優しくしてくれて、彼の家を住まいとして貸してくれた時期もあった。しばらくの間、僕たちの“基地”だったんだ。

彼は僕たちをバスキング（路上演奏）に連れて行ってくれて、ギター1本で人を惹きつけるパフォーマンスの基本を教えてくれた。本当にエンターテイナーだよ。
ポップスター並みのカリスマ性があるけど…歯は全部ないんだ（笑）。

ALONZA: ドンはあらゆる役割を果たしてたと思う。僕たちのトレーナーでもあり、鬼軍曹でもあり、訓練教官でもあった。ドリル（訓練）のような 練習も指導してくれたし、料理もよく作ってくれた。本当に何でもやってくれた（※クリスピアンが割って入って「それ本当」と補足）。
運転もしてくれたし、パフォーマンスのコツとか、どうやって音楽を“届けるか”も教えてくれた。
彼はバスキングの達人で、どうやってお金を稼ぐかもよく知ってるんだ。スペインの南端でガソリン切れになったときなんて、ほんとに助かったよ。

彼は音楽的な天才ってわけじゃないけど、彼から学んだのは「大事なのは演奏技術よりもパフォーマンスだ」ってこと。“雰囲気”がすべてなんだってね。

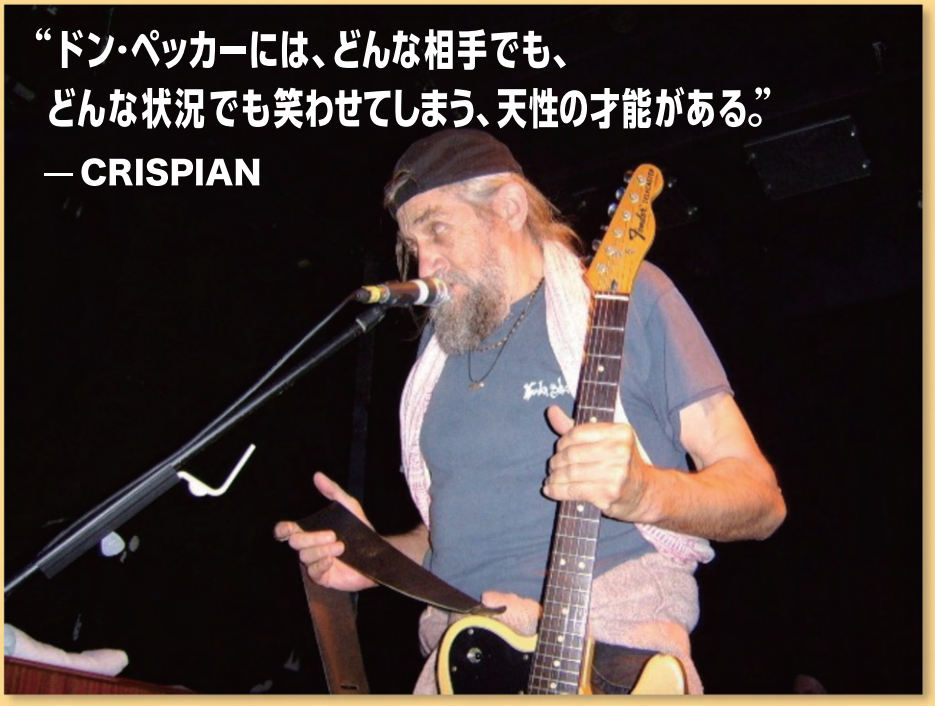
彼はいつも「お前らはすべての街、すべての村で演奏するようになる」っていうビジョンを持ってたんだ。

PAUL: ドンは俺たちの大家さんだった！そして変人だった。彼の言うことは一見狂ってるように聞こえるけど、実はだいたい正しいんだ。彼は自分のことを、「狂気のグル（導師）」って言ってたけど、確かにバンドにもある種の“狂気”が注ぎ込まれてた。クリスプ（クリスピアン）は、彼の中に“狂気の中の知恵”を感じていたと思う。
有名になる前に彼が言ってた「そのうちお前らは、便所でのんびりするヒマすらなくなるぞ」って言葉は、『K』がリリースされた頃に本当に思い出したよ。あの頃は、全然家に帰れなかったし、ロンドンに住む場所がなくて、ホテルで目覚めてもどこにいるのか分からなかったくらいだった。

K20ツアーの計画は？

CRISPIAN: それは一種のタイムトラベルになると思う。でも「過去に戻る」んじゃなくて、「過去を未来へ招き入れる」っていう感じ。微妙な違いだけど、大事なんだ。
今、みんなが求めてるのは、あのレコードを“いまの音”で聴くことなんだけど、同時に、当時の気持ちも思い出したいんだと思う。

このアイデアについて、すごくたくさん話し合った。最初は『K』を全部演奏する案に、全然乗り気じゃなかったんだ。プロモーターが「クリスマスにぴったりだし、きっと成功するよ」って、ものすごく乗り気だったけど、3ヶ月は保留にしてグズグズしてた。その後、プライマル・スクリームが『Screamadelica』を全曲再現してて、キャロル・キングも『Tapestry』を演奏してるのを見て、「ああ、これって客観的に見るとアリだな」って思えた。僕自身キャロル・キングの『Tapestry』全部演奏するライブを観たいと思うしね、すごく感情的になっちゃうけど（笑）。



ちょっとノスタルジーがあるのは事実。でもそれって良いことだと思う。だって、もう20年なんだから！これは“1回限りのイベント”になるよ。もう二度とやらない。50周年にまたやるかもだけど…僕らが生きてたらね。

それに『K』は元々、アルバム全体を通して聴くように構成されてるんだけど、ライブで順番通りに演奏したことは一度もなかった。それが、すごくワクワクするんだ。これは単なるライブじゃなくて、“出来事”になる。特別な“体験”になるんだよ。

**“それは一種のタイムトラベルになると思う。
ただ過去に戻るんじゃなく、
扉を開いて「過去を未来へ招き入れる」んだ。”
— CRISPIAN**

Photo : Andrea Zachrau

では、最後に――Kula Shakerの未来はどうなると思いますか？

CRISPIAN: 分からない。正直、年明けのことさえ見えてないんだ。とりあえず「K20ツアー」をやりきること。それが今の目標だよ。それが終わったら、いったん距離を取って、状況を整理することになると思う。
『K 2.0』はまさに円が一周して閉じるようなものなんだ――バンドが自分たちの原点と和解する、そんな感じ。バンドがその“出発点”と和解するような。だから次は、新しいサイクルに入らなきゃいけない。次のアルバムを作るなら、それは独自の個性を持った作品じゃないといけないし、それをどうするか、いろいろ模索していく必要がある。

それに、これだけ赤ちゃんが生まれてることを思えば、さすがにまた5年も空くなんて極端なことにはならないと思ってるよ。
でも年明けには一旦止まって、深呼吸をする予定。今年は本当に楽しかったし、素晴らしい瞬間もたくさんあったけど、音楽業界そのものが、ようやく“落ち着きのフェーズ”に入ってきたとも感じてる。今や音楽は“視覚的”なものになってる。人はスマホで音楽を“見る”ようにして聴いている。スマホが僕らの生活の中心にあるんだ。だからこそ、今の世界で「自分たちはどうやって音楽を作り、人々はそれをどうやって聴くのか？」「音楽の役割とは何か」を改めて考えなきゃいけないんだ。

2006年に『Revenge of the King』を出したとき、まさに音楽業界にとっての“黙示録”だった。みんなが炎に包まれて、叫んで、沈みかけたタイタニック号の上を右往左往してるような時代だったよ（笑）。

だから僕たちは独立して、自力で行く道を選んだ。時間はかかっても、自分たちの足で歩くしかないってね。それって、ある意味「再出発」だったんだけど、今ここにいられることを、とても嬉しく思ってる。音楽の面では、俺たちは蘇った。新しい日が始まり、新しい世界が開け、新しい命が吹き込まれた。――もしかしたら「中年の危機」が来るかもね？

**いや、それは1999年にもう経験しましたよ。
あれはファンにとってもドラマチックでした（笑）**

CRISPIAN: ああ確かに、1999年は真っ暗闇だった。
でも今振り返ってみると、それから18ヶ月後にはアメリカの同時多発テロが起きて、インターネットが僕たちの生活を支配し始めたんだよ。すべてが同時期に起こったんだ。まさに新しい時代の始まりだった。人間の生き方、コミュニケーションの方法、全部変わった。子供のころ話していたような“未来”が、現実になったんだよ。そして今また、同じような“大きな変化”が起ころうとしている。
だから、次に何をやるにしても、この新しい世界の中で、僕たちの音楽がどこにフィットするのかを探す必要がある。それに来年は、もしかしたらまた映画を撮るかもしれないし。どっちにしても、少し休憩をとって、それぞれの立ち位置を見つけ直す時間が必要だと思う。

ALONZA: 次に何があるかなんて、さっぱり分からないよ…たぶん、また音楽を作ると思うけどね（笑）。
Tumblewildと何か新しいことをやりたいし、また違ったタイプの作品もいいかもね。
『K2.0』で共演したシタール奏者のオリヴィエ・ルクレールとまたスタジオでも一緒に何か作りたいと思ってる。

PAUL: 俺たちにも正確なことは分からないよ。クリスプが言ってたみたいに、映画を撮るかもしれないけど、それがどうなるかは彼自身が一番よく分かってるはず。
もちろん、それがどうなるかによって、来年の俺たちの予定も影響を受けることになるだろうね。確かに前回の時は、彼は1年間バンドを離れて映画に集中して、そのあと映画のプロモーションにも時間を取られて、それでまたバンドに戻ってくるまでに結構かかったんだ。

でも今の俺は、前にバンドが止まった時よりも、もっと“運命に任せる”って感じで捉えてる。ある意味、それが良い学びになったのかもしれない。
スピリチュアルなことに関しては、ちょっと尻込みしてた部分もある。クリシュナ信者の人たちが、テレビや食べ物、物質的なものへの執着を捨てているのを見て、少しハードコアすぎるというか…すごく高い境地に思えて。
でも、このバンドをやってきたことで、「執着しないこと」を学んだんだ。一日一日を、そのまま受け入れる。それが、恐れずに生きるということなんだと思う。

思い出に感謝してるし、友達と笑い合って、ラウドなロックンロールを演奏できることに感謝してる。それだけで十分だし、すごく特別な贈り物だと思う。スタジオでもステージでも、“今この瞬間を生きる”ことがすべてだ。

『303』の歌詞――“I got my friends and I love my friends, right to the end.（俺には仲間がいる、仲間が大好きだ、最後までずっと）”――みたいにね。

だから、今はとてもリラックスしてるし、誰かにプレッシャーをかけようなんて気もないよ。そんなの意味がない。みんなそれぞれのペースや流れがあるんだから、この年になって“誰かに自分のやり方を押しつける”なんて、ありえないよ。

**“思い出に感謝してるし、友達と笑って、
ラウドなロックンロールを演奏できることに感謝してる。”
— PAUL**

Photo : Simon Roberts

“音楽の面では、俺たちは蘇った。
新しい日が始まり、新しい世界が開け、
新しい命が吹き込まれた。”
—CRISPIAN

Photo : Andrea Zachrau

ライブを特別にするのは、観客との関係性だ。

“『K』には若さのエネルギーが詰まってる。あれは若いうちにしか作れないアルバムだ。”

— HENRY

Photo : Andrea Zachrau

by Henry Bowers-Broadbent

いま僕は、日本のとある会場のバックステージに座っている。これからステージに上がって、リリースから20年経ったアルバム『K』を演奏するために。そして今、初めてこの音楽と出会ったときのことを思い返している。

正直に言うと、『K』が出た当時、僕の中ではまったく引っかからなかった。というか、僕がそれを見逃していたのかもしれない。どっちにしても、その頃の僕はジャズを多く演奏していたし、ちょっとファンキーなオルガン・グラインダー系の音楽をやりつつ、パブで働いていた。

そこから10年くらい経って、相変わらずジャズをやりながらも、セッションにも参加していたけれど、ロック界隈の仲間たちと関わることが増えてきた頃だった。

ある日、「Yes」のギタリスト、スティーヴ・ハウの息子で友人のヴァージルから連絡があった。クリスピアンが、僕とヴァージルで作ったレコードのオルガン・プレイヤーのことを気にしているというのだ。興味深い話だった。
その後ドッジ本人からも電話があり、いろいろ話をした。「3月何してる？」と聞かれたけど、そのときはインドに行く予定だった。なんとも不思議な巡り合わせだよね。

それから4月、ロンドン南東部のリハーサルスタジオでようやく合流できた。だから実質的に『K』の楽曲に本格的に向き合ったのは、ライブが初めてだったんだ。

ハーモニー的に言えば、ジャズとロックの演奏ではまったく違うアプローチを求められる。どちらも最終的な目的は同じで、聴く人を興奮させたり癒したり、緊張を生み出しては解放し、耳や思考を別の場所へと連れていく。つまり、観客との間に反応を生み出すということだ。でもロックの“仕組み”は、それを表現するためにずっと大きな筆で描かなくてはならないし、演奏の見せ方にも遥かに繊細な注意を払う必要がある。それは僕にとってかなりの衝撃だった。初期のライブでは、命綱を握ってとにかくしがみついていくのに“必死”だったよ。

ライブ前にリハもそんなにできなかったからミドル8（間奏部分）のコード進行や、バックコーラスの歌詞が書かれた紙切れが、ステージのあちこちに散らばってた。まさに“火の中へ放り込まれる洗礼”だった。
ドンもいたし、ポーリーの知り合いの仲間がドッジのギターのセットアップを手伝ってた。シュルティボックスと大量のお香も用意されていた。
そして、会場はなんと屋内スキー場で、かなり奇妙な体験だった。ステージを見つけるのにかなり時間がかかったと思う。これは秘密のウォームアップショーで、他のメンバーは、その前に「食べ放題ビュッフェ付きのパブの裏部屋」で演奏してたんじゃなかったかな。

当時、僕たちは『K』の曲をかなり頻繁に──時には断続的に──演奏していたと思う。たぶん「Hollow Man

Pt. 2」なんかもやってたと思う。「Start All Over」はあんまりやらなかった。「Into the Deep」をやるようになったのはもう少し後だった気がする。もし違ってたら訂正してくれ。

『K』には若さゆえの爆発的なエネルギーが詰まっていて、演奏するのはとにかく楽しい。でも、ライブを特別なものにするのは、やっぱり観客との関係性なんだ。「Govinda」がまさにその象徴だと思う。時々、思うのはひとつの部屋にふたつのグループがいるような感覚だ。片方には演奏者や技術スタッフがいて、もう片方には観客がいる。だけど、みんながそれぞれの役割をちゃんと果たせば、それはとびきり素晴らしい体験になる。ライブっていうのは一方通行じゃなくて、双方向のやりとりなんだ。両者が互いに影響し合い、エネルギーを与え合う。観客は、僕がこの音楽を理解する上で欠かせない一部になっていった。演奏の仕方だって、それによって少しずつ変わってくるんだ。

もちろん、その場の熱気の中で正確な音を見失いそうになる誘惑もある。──それはどんなミュージシャンにもあることだと思うけど、できる限りそうならないようにしたい。要は、外向的な表現と内向的な集中、その両方のあいだでバランスを取ることなんだ。

昔、ジャズ・ピアニストのデイヴ・ブルーベックのインタビューを読んだことがある。彼はよく「観客とコミュニケーションを取らない」「内にこもりすぎている」とよく批判されたらしい。でも彼は「どうしようもないんだ、音楽に没頭しすぎてしまうんだ」と言っていた。クーラ・シェイカーでは、それはちょっと無理だ。このバンドの曲は、そもそも“関係性”の中に存在しているし、自分はその関係性の一部としてそこにいるだけなんだから。

ヘンリーに聞いてみた…

── アルバム『K』ががリリースされたときのことを覚えていますか？何か印象はありましたか？

おもしろい話があってね… 当時、僕はパブで働いてたんだけど、ちょうどブラック・ミュージックとかファンク系の音楽ばっかり聴いてた時期だった。そしたら一緒に働いてたヤツが「このバンド絶対好きだよ、めちゃくちゃファンキーだから」って。で、パブのジュークボックスで『K』を聴いてみたら、「いや、これファンクじゃなくてロックンロールだろ！」って思った（笑）。で、何年も経ってから、気づいたら自分がそのバンドで演奏してた。すごく変な話だけど、人生ってそういうもんだよね。不思議だよ。

── どうやってバンドに加わることになったんですか？

もともとファンクバンドでハモンド・オルガンを弾いてて、The Meters（ニューオーリンズ・ファンクのレジェンド）の曲をよくやってたんだ。ロンドン西部の“ウェストウェイ”の下にある“Neighbourhood（ネイバーフッド）”ってクラブで演奏してたとき、そこのDJがソウルっていう人で、クリスピアンのいとこだったんだ。ソウルが「サポートバンドが必要ならこのバンドがいいよ、めちゃくちゃ良いから」ってクリスピアンに薦めてくれて。で、『Revenge』のレコーディングのときにジェイが別のことをやってて不在だったから、代わりに僕に声がかかって、それでクーラ・シェイカーと一緒にやることになったんだ。

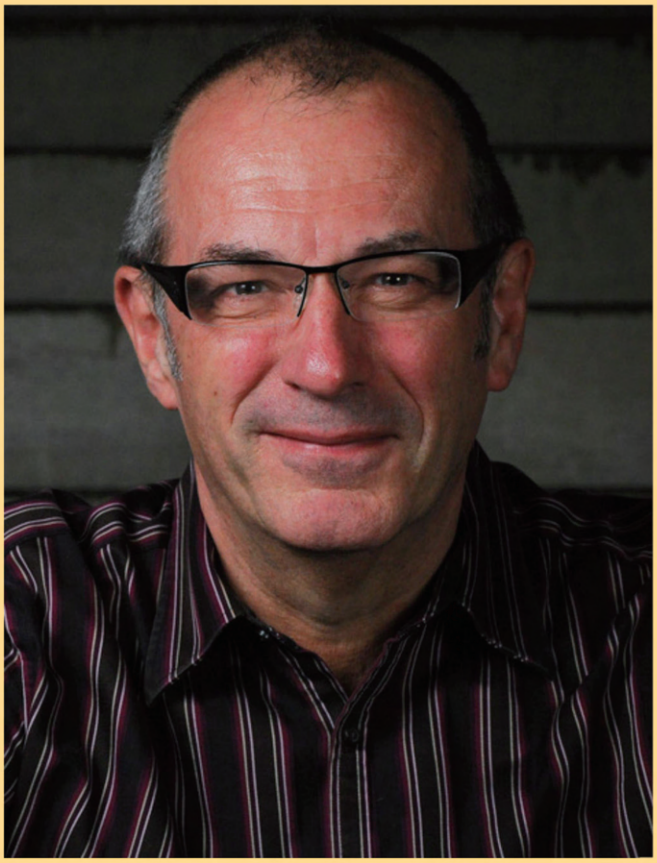
── 『K』の曲の中で、特に印象に残っている曲は？

うーん、どうだろう！ライブで言うと、「Govinda」を演奏するのは毎回特別な体験だよね。あの曲には何かある。だってあれ、世界で唯一のサンスクリット語で歌われてるロックソングなんじゃない？…『K』の曲は全部好きだけど、やっぱりあのアルバム全体に流れてる若さのエネルギーがいい。あれは若いうちにしか作れないものだと思う。

── 来年の予定は？

分からないよ！まずはちょっと休もうかなって思ってる。娘とゆっくり過ごしたいし。今年は思ってた以上に忙しかったし、クリスマスに向けての時期もバタバタで。来年も多分似たような感じでやっていくと思うけど、少なくとも最初の数ヶ月はのんびりしたいね。

“これは、今かなり流行ってるのかもと気がついたんだ。”



by Andrea Zachrau

90年代の音楽シーンを振り返ると、クーラ・シェイカーが群を抜いて目立っていたのは音楽だけじゃありませんでした。レコードショップの棚に並ぶ中でも、ひときわ目を引いたのが、鮮やかで独特なイラストのジャケット。『K』のカバーアートを手がけたのは、英国を代表するコミックアーティスト、デイヴ・ギボンズ。彼は『2000 AD』や『ドクター・フー』、『グリーン・ランタン』、『スーパーマン』『バットマン』『ウォッチメン』などの作品で知られています。このインタビューでは、彼がどのようにしてバンドと出会い、どんな風にアートを作り上げていったのか、そして音楽とアートへの愛を語ってくれました。

『K』のカバーアートを手がけることになったきっかけは？

実はあのとき僕はアメリカ、カリフォルニア州サンディエゴのComic Con（コミコン）に息子と行っていたんだ。そこにイギリスにいる妻から電話があって、「クーラ・シェイカーっていうバンドの新作アルバムのカバーイラストを描いてほしいって連絡があったわよ」って言うんだよ。バンド名がよく聞き取れなくて「クーラ・シェイカー？」って聞き返したら、当時17歳だった息子が両手で親指を立てて「イェーイ！」って（笑）。そのとき、「これは、今かなり流行ってるのかもな」と気がついたんだ。
イギリスに帰ってから、アルバムのデザインを担当していたロブ・オコナーと連絡を取った。彼はバンドとスタイルの打ち合わせをしたときに「デイヴ・ギボンズみたいな人にやってもらいたい」と言われたらしくて。実は、僕の友人ライアン・ヒューズとスタジオをシェアしてたから、「ギボンズみたいな人？本物を呼ぼう」となったらしい（笑）。たぶん『ウォッチメン』や『2000 AD』あたりの作品を見てくれてたのかな。

バンドとのカバー制作はどんな感じでしたか？カバーをデザインしていた頃の思い出などがあれば教えてください。

実際にやり取りしていたのは主にクリスピアン・ミルズで、彼はどういうビジュアルにしたいかかなり明確なイメージを持っていたよ。彼のアイデアには、クリシュナとその妻、そして“K”に関係するさまざまな人物の肖像を配置するというものがあって、私は何点かラフを描いてバンドに見せたんだ。そうするとクリスピアンが電話をかけてきて、「この人も加えてくれない？」と提案してくる、というやり取りがしばらく続いて。最終的に、ある日彼からまた電話が来たときには、「ごめん、もうこの船は出港しちゃってて、乗るべき人はもうみんな乗ってるよ」って伝えたよ（笑）。

録音スタジオに会いに行ったこともあったと思うし、電

話でも何度か話したね。印象的だったのは、ある晩クリスピアンに電話したら、とても上品な女性が出て「呼んできますね」と言ってくれて。受話器を置くときにふと気づいたんだけど、その人が実はヘイリー・ミルズだったんだ。彼女は子役として活躍していて、ディズニー映画でよく知っていたのでびっくりしたよ。

そうだね、バンドと関わるのは本当に楽しかった。みんな本当にいい人たちで、特にクリスピアンはすごくオープンで、想像力が豊かで、とてもクリエイティブなアイデアを持っていた。
それに、僕の息子にもとてもよくしてくれて。僕は何とかして彼にライブのチケットを何枚か取ってあげたんだけど、少なくとも一度は、実際にバックステージに招いてくれて、バンドと一緒に食事をして、おしゃべりする機会まであったんだ。彼らは本当に息子に優しくしてくれたし、素晴らしい体験だったよ。

カバーに登場するキャラクターの人選についてはどう感じましたか？

これはほとんど、クリスピアンが“K”にちなんだものを次々に提案してきて、それに僕がいくつか自分のアイデアを足してくって流れだったね。妻の名前がケイトだったから、彼女もメンバー入れたり（笑）。政治、文学、音楽、エンタメなど、ジャンルを問わずいろんな人物を盛り込んで、できるだけ幅広いキャラクターを集めようというコンセプトだったんだ。

1996年当時を振り返って、このカバーはKula Shakerを他のバンドと差別化することに貢献したと思いますか？

うーん、その頃どんなカバーデザインが流行っていたか正確には思い出せないけど、当時の他のカバーはもう少しハードでグラフィカルな感じだったんじゃないかな。だから、クラシカルな線と色で描かれたイラスト的なスタイルは、確かに目を引いたと思う。色もすごくカラフルだったし、暖色系の背景と、青を基調にしたキャラクターのオーバーレイとのコントラストも強かったしね。

それに、これは僕にとって最初期の“すべてコンピューター上で合成した作品”のひとつでもあるんだ。手描きしたのは人物と顔の絵だけで、それぞれを一枚ずつ描いてスキャンし、それをすべて一つのイラストとしてまとめていった。そういう意味でも、当時としてはかなり珍しかったし、目を引く存在ではあったと思うよ。

アルバムカバーは20年前と比べて、今も同じような意味や重要性を持っていると思いますか？

正直言って、今では当時のような意味や重要性はまったく持っていないと思う。僕が育った時代はみんなアナログ盤で聴いていて、ジャケットも大きくて、アートや文字をしっかり見せられたんだ。それがすごく良くて、ポスターやアート作品のように印象的なものも多かったね。たとえば『Tubular Bells（チューブラー・ベルズ）』のデザインとか、レッド・ツェッペリンのカバー、あるいは僕が大好きだったモータウンやスタックス、アトランティックのレーベルなんかのデザインは、本当にかっこよかった。

CDが主流になってもまだある程度まではそういう表現ができてたけど、やっぱり全体的にスケールダウンしてしまって。そのせいもあって、デザイン自体もどんどんシンプルになっていったんだと思う。というのも、あの小さなサイズでは細かいディテールを再現するのが難しかったからね。

今では、ほとんどの人が──僕自身もそうだけど──音楽をストリーミングしたりダウンロードで聴く時代だから、アルバムのジャケットなんて画面の隅にちょこんと出てくる小さなサムネイルくらいしか見ないよね。
だからある意味では、アルバムアートってちょっと失われた芸術になってしまったと思うし、それは音楽もアートも大好きな僕にとっては残念なことだよ。

でも、想像力あふれるバンドのために、すごく特徴的なビジュアルの作品を作れたっていうのは本当にうれしいことだし、クラシックなアルバムジャケットを手がけるというプロセスそのものも、すごく楽しめたよ。

Daveの素晴らしい作品は、ぜひXでもチェック!
https://x.com/davegibbons90

Kディスコグラフィー

『K』は、ジョージ・ハリスン、グレイトフル・デッド、キンクス、ディープ・パープル、ドアーズといった偉大なアーティストの影響を受け、60年代ロック、ブリットポップ、インド神秘主義を融合させて誕生した。
激しい音量、歪んだギター、そしてキャッチーなメロディが押し寄せるように構成されており、色彩豊かなネオ・サイケデリアの痛快な炸裂として高く評価されている。「Grateful When You're Dead」「Tattva」「Hey Dude」「Govinda」の4つのクラシックなヒット・シングルを生み出し、1996年に最も速く売れた英国デビュー・アルバムとなった。
発売と同時に全英1位を獲得し、現在でもQ誌の「史上最高のアルバム100」に名を連ねる、時代を超えた名作の象徴だ。

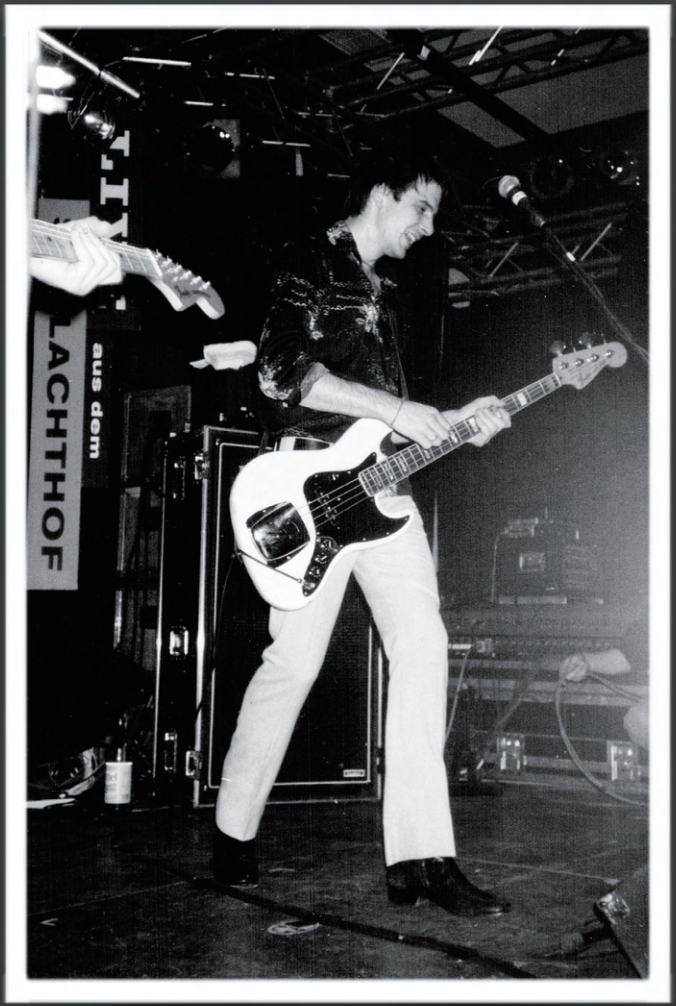
シングル

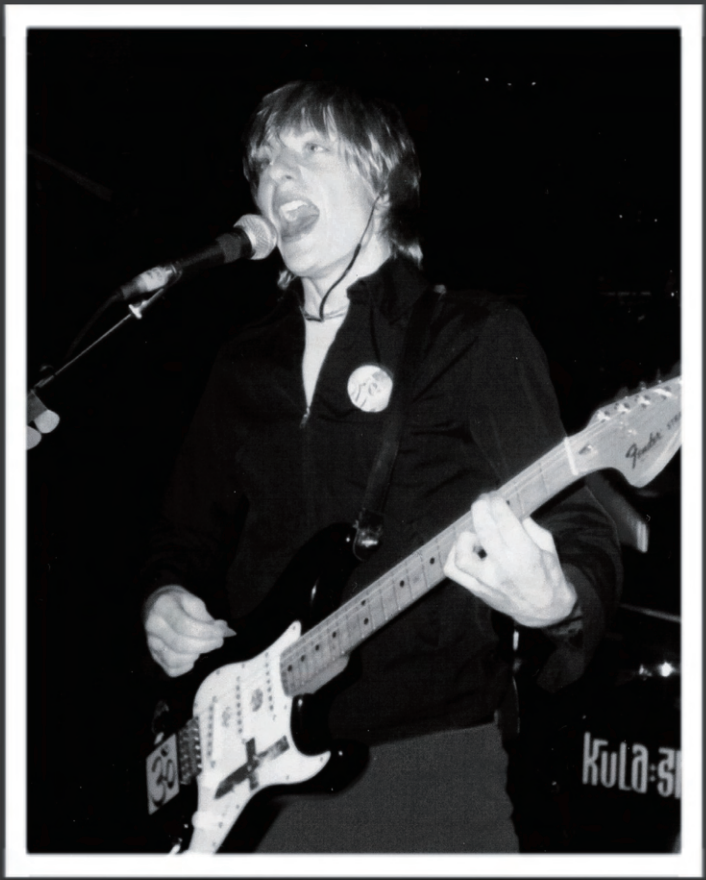
Tattva (Lucky 13 mix) / Hollow Man Pt 2	【7"レコード】	95年12月
Tattva (Lucky 13 mix) / Hollow Man Pt 2	【CD】	95年12月
Grateful When You're Dead - Jerry Was There / Another Life	【カセット】	96年 4月
Grateful When You're Dead - Jerry Was There / Another Life	【7"レコード】	96年 4月
Grateful When You're Dead - Jerry Was There / Another Life / Under The Hammer	【CD】	96年 4月
Grateful When You're Dead - Jerry Was There / Another Life / Under The Hammer	【プロモ CD】	96年 4月
Tattva / Tattva on St. George's Day / Dance In Your Shadow	【7"レコード】	96年 6月
Tattva / Tattva on St. George's Day / Dance In Your Shadow / Red Balloon (Vishnu's Eyes)	【CD】ポスター付き	96年 6月
Tattva / Dance In Your Shadow / Moonshine / Tattva (Lucky 13 Mix)	【CD】	96年 6月
Tattva / Tattva on St. George's Day	【プロモ CD】	96年 6月
Hey Dude / Troubled Mind	【ジュークBOX用 7"】	96年 8月
Hey Dude / Tattva / Drop In The Sea / Crispian reading from the Mahabharata	【CD】ポスター付き	96年 8月
Hey Dude / Troubled Mind / Grateful When You're Dead (BBC Session) / Into the Deep (BBC Session)	【CD】	96年 8月
Hey Dude / Troubled Mind	【カセット】	96年 8月
Hey Dude	【プロモ CD】	96年 8月
Govinda (Radio Mix) / Gokula / Temple Of The Everlasting Light	【7"レコード】限定5000枚	96年12月
Govinda (Radio Mix) / Gokula / Hey Dude (London Astoria ライブ) / The Leek	【CD】	96年11月
Govinda (Hari and St. George) / Gokula / Govinda (Monkey Mafia Pigsy's Mix) / Govinda (Monkey Mafia's Ten to Ten)	【CD】ポスター付き	96年11月

Govinda (Radio Mix) / Gokula	【カセット】	96年11月
Govinda (Radio Mix)	【プロモ CD】	96年11月
Govinda（Monkey Mafia Pigsy's mix）/ Govinda（Monkey Mafia's ten to ten）	【プロモ 12"レコード】	96年11月
Govinda Live/Smart Dogs Live（Wilton's Music Hall ライブ 2016年5月）	【10"レコード】限定500枚	2016年 9月
Hush / Raagy One	【カセット】	96年11月
Hush / Raagy One / Knight On The Town（London Astoria ライブ）/ Smart Dogs（London Astoria ライブ）	【 CD 】	97年 2月
Hush / Raagy One / Under The Hammer (Hold On To The Magical Key) / Govinda (Plymouth ライブ 97年1月26日)	【 CD 】ポスター付き	97年 2月
Hush	【7"レコード】97年2月（7月にも再販）	

アルバム

K	【カセット】	96年 9月
K	【 CD 】	96年9月
K	【 CD'（デジパック仕様）】	96年9月
K	【12 " レコード（インナー・スリーブ付）】	96年9月
K	【 MiniDisc 】	96年 9月
K	【プロモ CD】	96年9月
K15	（デジタル・リマスター盤・3枚組アルバムセット）【 2CD/1DVD 】	2001年 9月
K（K20周年記念盤【CD】		2016年11月
K（K20周年記念盤【LP】		2016年11月





1997年 Kツアー

BY RECORDED DELIVERY

28 November 1994

Chrispian Mills, Jay Darlington
Alonza Bevan and Paul Winter-Hart
(together pka "The Kays")
37 Buckley Road
Kilburn
London NW6 7LY
Dear Sirs

We refer to the Recording Agreement between you and us dated 20 June 1994 in respect of your exclusive recording services ("the Agreement"). In accordance with the provisions of clause 3(a) of the Agreement we write to give you formal notice that we hereby terminate the Term of the Agreement with effect from 30 November 1994. We enclose our cheque for the sum of £500 being the sum payable to you pursuant to clause 2(a) of the Schedule to the Agreement in respect of the month of November.

Yours faithfully

for and on behalf of
GUT REACTIONS LIMITED

GUT REACTION

BYRON HOUSE • 112A SHIRLAND ROAD • LONDON W9 2EQ • TEL 071 266 0777 • FAX 071 266 1293
GUT REACTIONS LTD. REG. IN ENGLAND No. 2075029 • REG. OFFICE AS ABOVE.

Photo : Andrea Zachrau

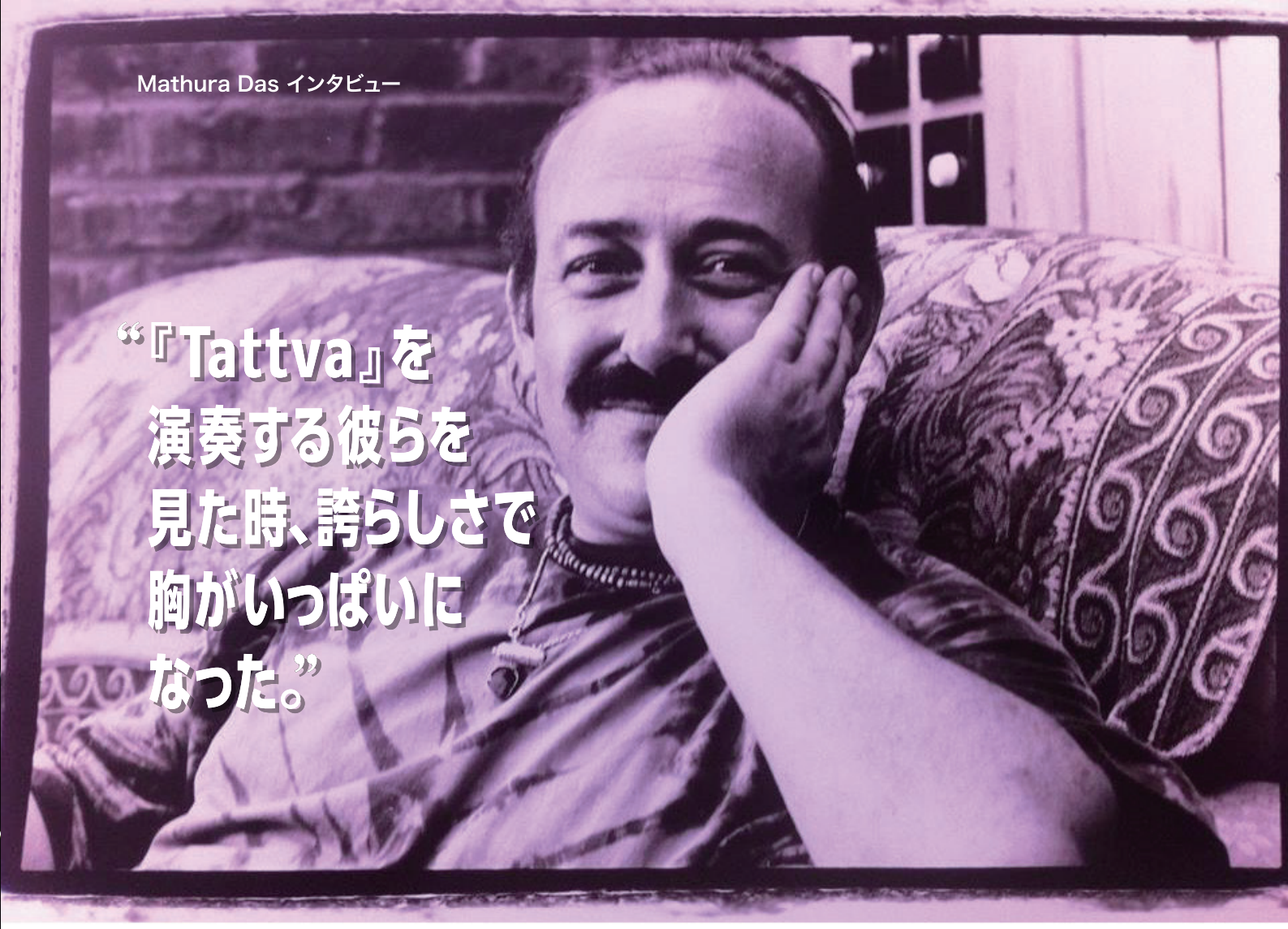
“Kは、それ自体が

バンドを支えた仲間が語る『K』時代 回顧録

Mathura Das、Simon Roberts、Graham Pattisonが振り返る、
クーラ・シェイカー結成とデビュー・アルバム制作についての思い出やエピソード。

Photo : Andrea Zachrau

Photo : Andrea Zachrau



“『Tattva』を演奏する彼らを見た時、誇らしさで胸がいっぱいになった。”

by Andrea Zachrau

Mathura Das（マトゥラ・ダス）は、クーラ・シェイカーの神話に登場する伝説的存在だ。20代をクリシュナ僧として質素で厳格な生活を送っていた。料理人、音楽家、画家兼内装業者、そしてハッシュ密輸業者（この罪でシベリアの刑務所に18ヶ月間収監された）でもあった。バンドのメンバーからは友人であり、指導者であり、インド芸術と哲学の「真の目利き」と称されている。
マトゥラ・ダスは1993年にインドでクリスピアンと出会い、彼の最初の旅を乗り切る手助けをしたという。今回はそんな彼に、バンド初期の軌跡を語ってもらった。

クリスピアンと最初に出会ったのはいつですか？

僕らは皆、ハンプトンに実家があったんだ。だから、実はインドで出会う前からクリスピアンのことは知ってた。ただ、彼は本当にシャイで、ちゃんと話せたことはなかった。
私は毎年恒例のようにインドに行っていたんだけど、その年の同じ時期に彼もインド行きを決めていた。彼はすでにアロンザやポールと出会っていて、“The Kays”やクーラ・シェイカーの種はその時点でもう蒔かれていたんだよね。

彼は当時、自分の人生をどうするべきか迷っていた。クリシュナ哲学にどっぷり浸かっていて、精神的な衝動がものすごく強くなってた。「プロのミュージシャンになるべきか、それともアシュラムで修行生活を送るべきか」って、本気で悩んでたんだ。そうしてクリスピアンはインドに旅立ち――そこで私は、ようやく彼とちゃんと出会うことになる。

最終的に、僕らはインド東部のベンガルで合流することになったんだけど、私は西に向かい、デリーを経由して1000マイル以上離れたヒマラヤに向かう予定だった。その時点では、彼は私と一緒に来るとは決めていなかった。

でも数日後、デリーの何千というホテルが立ち並ぶの密集地で顔見知りに偶然会ったら「お前宛てのメモがホテルの掲示板にあったぞ」って言うんだ。探してみたら、そこにはクリスピアンからの伝言があって、「予定を変えて君と一緒にヒマラヤに行くことにした」と書いてあったんだ。最後には――「友だちの家の住所を、デリーの北ってだけじゃなくて、マジックマッシュルームをキメてぶっ飛んでる日本人にも分かるくらい、分かりやすく書いてくれ」って付け加えられてさ（笑）。それで、彼のために地図付きの案内を掲示板に貼ったんだけど、「彼はどうやってこれを見つけて、ちゃんとたどり着けるのか？」って内心不安に思ってたよ。

2日後、私はその友人宅で彼のことを話してたんだ。
「イギリスの有名な俳優一家出身の友人でさ」って── そしたら、ちょうどその時ドアがノックされて、クリスピアンが来たんだよ！

あれは5月下旬で、その時期のインドはかなり暑かった。ヒマラヤまでの長旅は過酷だったけど、そこでは本当に楽しい時間を過ごせた。

あのとき彼が言ったんだよ──「イギリスに戻ったら、出会ったばかりの素晴らしい仲間たちとバンドを組むつもりなんだ」って。そして数ヶ月後、私がイギリスに戻ると、彼はすでにバンドを組んでいて、さらに未来の妻ジョーとも、インドから戻って数時間以内に出会っていたんだ。

あなたが戻った頃には、彼とアロンザは “The Kays” を始めていましたよね。初期の彼らのライブを観たことはありますか？

ロンドンで何度も彼らのライブを観に行ったよ。他のバンドと比べて、ものすごく上手くて驚いたよ。

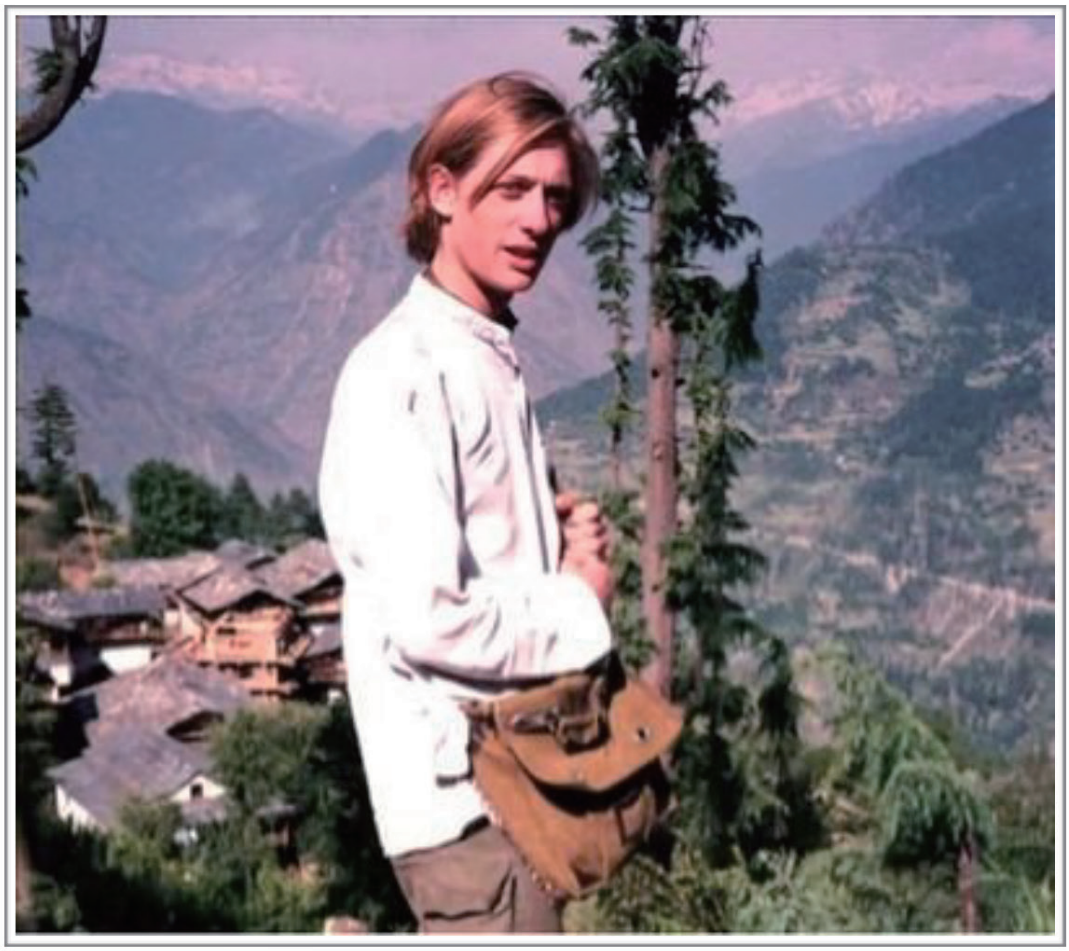
毎週、何時間もリハーサルしていたし、クリスピアンは非常に厳格なバンドリーダーだった。1音1音、1つ1つのドラムのビートまで、すべてに細かくこだわっていた。

ロンドン中の小さなパブで演奏していて、夜の最初の出演順を取るために午後からずっと待っていたけど、観客はあまり来なかった。でも、彼らはあの時期にすべての“土台”が築かれたんだ。

ハイゲートの彼らのシェアハウスにはよく出入りしていたそうですね。どんな雰囲気でしたか？

あの家は最高だったよ。彼らは60年代のサイケデリック・ムーブメントにどっぷり浸かってた。
サージェント・ペパーズやジョージ・ハリスン、インドのエッセンスがそこかしこにあった。ビートルズのポスターや60年代のレトログッズが壁を飾っていて、ポールの奥さんのニコールや彼女のバンド “Mediaeval Baebes”のメンバーたちも遊びに来てたね。

本当に美しくてカラフルな若者たちが集まる場所だった。ギターがあちこちにあって、みんなでセッションしてたよ。僕は料理人だから、彼らに料理のコツを少し教えてあげてたよ。

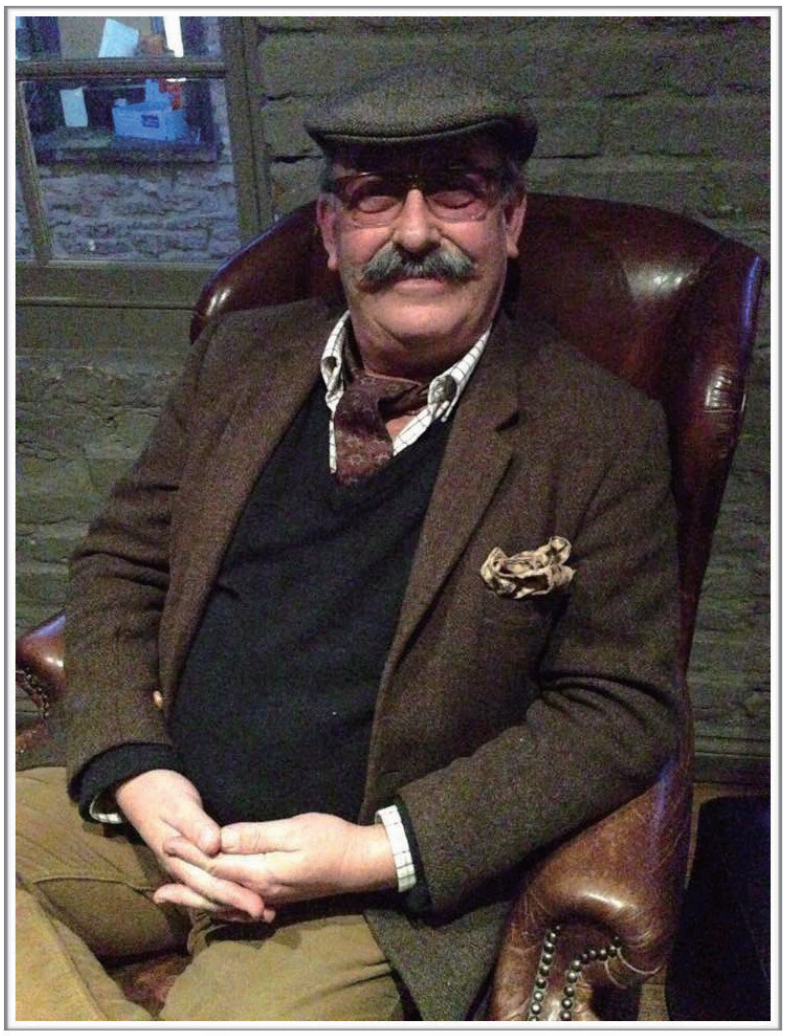


これは私たちが一緒にHimachal Pradesh（ヒマチャル プラデシュ）のヒマラヤへ旅したときの写真。たぶん1993年か1994年のどちらか。

**あなたがクリスピアンを初めてインド古典音楽のコンサートに連れて行ったそうですね。
彼はそれが「すべてを変えた」と語っています。その影響について、あなたはご存知でしたか？どのようなコンサートだったのでしょうか？**

私たちはロイヤル・フェスティバル・ホールでやっていた、インド音楽のオールナイト・コンサートに一緒に行ったんだ。その夜の出演者のひとりが、インドで最も有名で最高峰のバンブー・フルート奏者、Hariprasad Chaurasia（ハリプラサド・チョウラシア）だった。あの夜は、まあ、控えめに言っても、僕らはかなりハイだったよ。

クリスピアンにとっては、ある種の“通過儀礼”のようなものだったと思う。というのも、ああいう音楽を車の中やアパートのステレオで聴くのと、実際に生で目の前で体験するのとでは、まったく別物だから。特にフルート――あれはクリシュナと結びついているからね。だからこそ、クリスピアンにとってはあの音楽の真髄を理解したことはとても大きな意味を持っていたんだ。後にバンドはセカンド・アルバムで、実際にハリプラサード・チャウラシアに演奏を依頼することになるんだよ！



現在、マトゥラ・ダスはグラストンベリーに暮らしている。

クリスピアンはインドの精神性にはもともと関心を持っていたけど、あのとき彼は初めて気づいたんだ。インドのすごいところは、スピリチュアルな側面だけじゃなくて、「芸術」にもあるんだって。そして、自分がやっていることもまた、文化的な行為なんだってことを理解したと思う。そこから彼は、このスピリチュアルな文化を世界に広めていく一員になりたいと感じたんじゃないかな。

“Achintya bhedabheda tattva”っていうのは、サンスクリットの有名な格言ですが、あなたは、バンドにこの概念を紹介する上で重要な役割を果たしましたよね。

哲学的な観点から言えば、私は“Acintya behdabheda tattva”の作曲には自分は関与していないよ。でも、その背後にあるアイデアには少し影響を与えたかもしれないとは思う。

ある日、クリスピアンがリハーサルから戻ってきて言ったんだ。「マトゥラ、これきっと気に入ると思うよ」って。
それが「Tattva」の最初のデモだった。クリスピアンがこの曲のために作った、あの不思議で心に残るギターリフがすでに入っていてね。たしか冒頭はサイレンの音から始まっていたんじゃないかな。彼が言うには、多くのインスピレーションは僕らの会話から来てるってって言ってくれたんだ。

“Acintya bhedabheda tattva”っていうのは、僕とクリスピアンが共鳴している思想体系の中での哲学的結論（シッダーンタ）なんだ。それは、偉大な神秘家でありアヴァターラであり社会改革者でもあったシュリー・チェイタンヤ・マハープラブ（1486〜1533年）によって、西ベンガルに現れた伝統から来ている。その意味は「同時に、一体でありながら異なるという、理解を超えた真理」。つまり、矛盾のように見える（パラドックスな）状態――存在の統一性と多様性を、同時に説明する思想なんだ。

ラジオでこの曲が流れ、巨大なコンサート会場でも何万人もの観客がそれを歌ってるのを見たとき、どう感じましたか？みんながその意味を必ずしも理解していなかったとしても、それはあなたにとって重要なことでしたか？

率直に言って、クリスピアンがこの曲をここまで形にしたことをとても誇りに思ってるんだ。彼らがグラストンベリーで初めてヘッドライナーを務めた夜のことを今でも覚えてる。あの時、6万人は観客がいたと思う。そして彼らが“Acintya bhedabheda tattva”を演奏したとき、自分の胸が誇りでいっぱいになった。それは、自分がこの曲に関わっていたからというだけじゃなくて、その巨大な観衆の中にいる何千もの人たちが、Tattvaの意味なんて全く知らなくても、みんなが熱狂的にライターを振って一緒に歌っていたんだよ。あの瞬間は、僕にとって本当に大きな出来事だったよ。

この曲のサビでは、クリスピアンがTattvaの意味をたとえ話で説明している。“夏の花とその香りのように、太陽とその輝きのように。真理は奇妙な姿をまとって現れ、君の心にメッセージを送るかもしれない。”最初は「なんてキャッチーな曲なんだ」と思うかもしれないけど、実はその中には深い意味がたくさん詰まってるんだ。

Gauri Chaudry（ガウリ・チャウドリー）の声やHimangsu Goswami（ヒマングシュ・ゴスワミ）のタブラーは、アルバム『K』でとても印象的でした。二人はあなたの親しい友人であり、有名なキルタン歌手でもありました。バンドは自分たちのアプローチやスタイルの多くが、キルタン演奏の体験に影響を受けたと言っています。キルタンについて何も知らない人のために、それがどういうものか教えてもらえますか？

クリスピアンを僕の友人たちに紹介したんだ。伝統的なベンガルの家庭だった。初めて一緒にヒマングシュ・ゴスワミの家を訪れたとき、彼のお母さんが素晴らしい伝統料理をふるまってくれて、クリスピアンはすぐにその家族を好きになった。
ヒマングシュは有名な歌い手だけど、『K』では偶然にもタブラーを演奏してくれた。
その出会いの場で、ヒマングシュと長年の知り合いだった僕にとっては、だいぶ後になってからだけど、ガウリも僕たちの友人になった。彼女の歌声は本当に美しくて、僕らを魅了した。みんな「Govinda」のシンガーとして彼女のことを知ってるけど、その後セカンド・アルバム『Peasants, Pigs & Astronauts』でも歌っている。

キルタンっていうのは、集団で行う歌唱のことで、リードボーカルがいて、それに他の人が応答する形式なんだ。ヒマングシュの家系は、なんと14代もキルタン歌手を続けてきた家族でね。まさに血に刻まれてるってやつだ。
“Govinda jaya jaya”もキルタンの一種。祈りを含むものは“バジャン”と呼ばれることもあるけど、サンスクリット語のマントラ中心の形式は“キルタン”と呼ばれる。さらに、“サンキルタン”という言葉もあって、これは集団でのチャンティングを意味してる。つまり、みんなで一緒にそのリズムやマントラ、祈りにどっぷり浸かりながら、高次の精神的リアリティと繋がっていくような体験なんだ。

あなたは、クリスピアンにオリジナルKulasekhara（クラセカラ）を紹介して、バンド名が「The Kays」から「Kula Shaker」に変わるきっかけを作ったんですよね。クリスピアンはいつも、この名前が幸運をもたらしてくれたと言っています。“名前”っていうものが、それほどまでに人生や運命を変える力を持っていると思いますか？

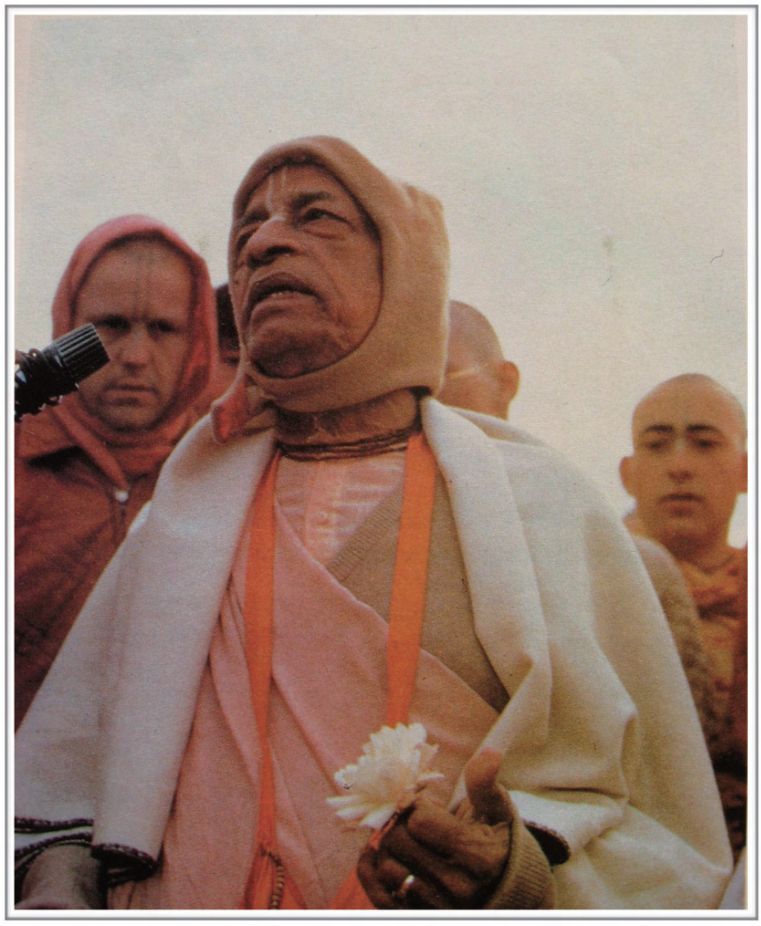
僕が生まれたとき、両親は3つの名前をくれた。最初がウィリアム、次にマーク、そして3番目がジェフリー。その“マーク”って名前から、僕は“マトゥラ”という名前を得た。
その名前の変化は、自分の人生にとってすごく重要だったし、確実に運命を変えたと思ってる。
ちょうど“The Kays”が“Kula Shaker”に名前を変えたときと同じようにね。

私がクリシュナ運動に参加したのは1973年のこと。そのときイギリスを離れて、アムステルダムにあるクリシュナのアシュラムに住むようになった。そこに行くきっかけをくれたのが、最初に私のメンターになってくれた人物で、クラセカラっていうイギリス人の信者だったんだ。

彼はイギリス人で最初期の信者の一人で、ジョン・レノンやジョージ・ハリスンの家にも住んでいたことがあった。
私よりちょっと年上で、大きな影響を受けた。長いあいだ会ってなかったんだけど、ある日、クリスピアンたちがロンドン北部のクリクルウッドのカウンシルハウスで共同生活をしてた頃に、クラセカラが久しぶりにイギリスに戻ってきて再会したんだ。そのとき初めて、クリスピアンとアロンザが彼に会ったんだ。

それから彼らもクラセカラと仲良くなってね。彼がアメリカに戻ってからも連絡は取り合っていたよ。当時、バンドはまだ“The Kays”って名前で活動してた。

私がまたインドから帰ってきたとき、クリスピアンが真っ先に言ったのが「バンド名をクーラ・シェイカーに変えたんだ！」って。
私は「マジか！」って驚いたよ。というのも、バンドがその名前にしたあの人物なら、きっとものすごく誇りに思うはずだから。



私が剃髪して、A.C.バクティヴェーダンタ・スワミ・プラブパーダの後ろを歩いていた時の写真。フランクフルト近郊のレターショフ城で、1974年6月初めに撮影。私が “'Mathura Das” という名を授かった、17歳半の頃。

名前を変えた途端、彼らの運は一変した。まるで一夜にして全てが変わったようだった。ポールの友人にグラストンベリー出身の連中がいて、「リーフ」っていうバンドをやってたんだけど、そいつらがメジャー契約を決めて、新しいツアーでクーラ・シェイカーに前座を頼んだんだ。そうして急に、いろんな意味で運気が変わったんだ。

ほんの少し前まで小さなパブやクラブでやってた彼らが、一気に大きな会場で演奏するスターになっていくのを目の当たりにするってのは、正直 驚くしかなかったよ。

あなたから見て、クーラ・シェイカーの未来はどうなりそうですか？

今年の5月、バースで彼らのライヴを観たんだ。その後、テレビでグラストンベリー・フェスティバルを観て、こう思ったよ。「くそ、彼らは今いる退屈なバンドの大半よりもよっぽどすごいじゃないか」ってね、ハハ！
一緒に行った友人のアンナも、期待以上だったって感激してたよ。

今年グラストンベリーにまた出演できなかったのは残念だった。彼らみたいなバンドこそ、まさにグラストンベリー向きなんだから。

私に言えるのはこれだけだ。彼らは本当に大切な友人で、私は彼らの活動を心から愛してる。
だから、心から彼らの未来がうまくいくことを願ってる。だって、そうなるべき連中だから。
そして願わくば、どこかに新しい世代のファンが待っていて、彼らの素晴らしい音楽と圧巻のライヴに熱狂してくれることを信じてるよ。

Peace & Love
Hari Om!

ピース&ラブ
ハリ・オーム！

King Kulasekharaに祝福あれ

by Daiane Hemerich

最初に目につく際立った特徴のひとつは、バンド「クーラ・シェイカー」がインド音楽や文化、そして神秘主義から深い影響を受けているという点です。最も有名な代表曲には、サンスクリット語の歌詞やインドの伝統楽器の使用といった、分かりやすい手がかりがあります。このような東洋からのインスピレーションは、バンド名そのものにも表れています。バンド名は、Kulasekhara（クラセカラ）王にちなんで名付けられたものです。

しかし、この名前の背後にはどんな物語があるのでしょうか？まずは、少し歴史をひもといてみましょう。
Kulasekhara Varman（クラセカラ・ヴァルマン）〈または、Kulasekhara Aalvar（クラセカラ・アールヴァル）としても知られる〉は、西暦800年から820年にかけて、南インド・ケララ地方を治めていた王でした。

彼は、クリシュナ意識国際協会（ISKCON）の創設者であるA. C. Bhaktivedanta Swami Prabhupada（A・C・バクティヴェーダンタ・スワミ・プラブパーダ）の著作にも登場し、クリシュナ神への忠実な帰依者を貫いた偉大な王として語られています。

彼の讃美歌は『Mukunda-mālā-stotra（ムクンダ・マーラー・ストートラ）』というサンスクリットの経典にまとめられており、今も多くの信者によって歌われ続けています。プラブパーダ師はある講話の中で、「人が王であろうと施しを受ける修行者であろうと関係はない。誰もが神への偉大な帰依者になる可能性を持っている」と説いています。
プラブパーダ師は、『ムクンダ・マーラー・ストートラ』を、クリシュナの栄光を唱えることと、その効果を享受することの大切さについての教訓であると解釈しています。これは、物質的な執着に囚われた人々には得られないことです。

『神の栄光を陶酔的に謳うことができる者こそが、真の信者である。この陶酔は、至高なる存在への深い愛から生まれる副産物であり、その愛は称賛と詠唱の行為によって育まれるのだ。争いと混乱のこの時代において、クラセカラ王が推奨した“称賛と詠唱”の実践こそが、霊的完成を得る唯一の道なのである。』

さて、本題に入りましょう。先のマトゥラ・ダスのインタビューでも 語られていた通り、Kula Shakerというバンド名は、1960年代のクリシュナ意識運動における初期のイギリス人信者のひとり、“クラセカラ・ダス”にも由来しています。彼はビートルズにも影響を与え、1969年にはジョージ・ハリスンと共に『ハレ・クリシュナ』のシングルを録音するまでになった人物でもあります。

1994年、ロンドンのラーダ・クリシュナ寺院の創設25周年記念行事の際、マトゥラ・ダスはクリスピアンをクラセカラ・ダスに紹介しました。クリスピアンはこう回想しています。

「彼はビートルズと一緒に過ごした話や、イギリスで最初の寺院を開いた頃の話、そして初期のプラブパーダ師との旅の話をたくさんしてくれたんだ。どれもすごくインスピレーションに満ちたものだったよ。」

そのクラセカラ・ダスから、彼の名の由来であるクラセカラ王についても教えられたというクリスピアン。
彼は、改名するまで何年も苦闘したバンド“ブラック・サバス”が改名後にブレイクしたという話にも影響を受け、“The Kays”から“Kula Shaker”へと名前を変える決断をしました。
そしてその名を掲げた後、バンドの運命は劇的に好転します。1995年の改名以降、Kula Shakerはチャートを賑わす大成功を収めました。

20周年を迎える今、Kula Shakerという名に宿る霊的なインスピレーションと、それを授けたふたりの“クラセカラ”――南インドの王と、イギリスの帰依者――に感謝と敬意を表す、今が絶好の機会ではないでしょうか。

“さあ兄弟たちよ、集まって歌う時が来た
長い間、ずっと待っていた王の帰還を”

Mills & Bevan
2005年『Revenge of the King』より

“今なお音楽の熱量がまったく衰えていないというのは本当に驚くべきことだ。”

by Andrea Zachrau

多くの人々の中でも、Kula Shakerに関わるSimon Roberts(サイモン・ロバーツ)は、まさにバンドと“最初から今まで”を共にしてきた人物です。彼は親しい友人であり、ギターテクニシャン、サポートアクト、タンバリン奏者、料理から雑用まで何でもこなすバンドの何でも屋。そんな彼に、クーラ・シェイカーの黎明期や、バンドと共に歩んだ数々の思い出について語ってもらいました。

メンバーと初めて出会ったときのことを覚えていますか？当時の彼らはどんな感じで、どんな目標を持っていたと思いますか？音楽に対してはどんな印象を受けましたか？

ポールとは、彼がバンドに加入するずっと前からの知り合いだったんだ。というのも、彼の弟のジョフが僕の親友だったからね。まだバンド名が“The Kays”だった初期の頃、僕はサマセットにあるポールとジョフの実家でよく一緒にいた。バンドが練習や録音をしに来るようになったのも、ちょうどその頃だった。
その頃は、クリスピアンのいとこであるソウルがボーカルを務めていて、クリスピアンはギターを弾いていた。彼らはとてもフレンドリーで魅力的だったよ。ソウルはモデルをしていて、レニー・クラヴィッツみたいだったのを覚えている。彼らは紅茶をたっぷり飲み、ベジタリアン料理をせっせと作り、お香をこれでもかというほど焚いていて、60年代風の服装をしていて、しかも取り巻きまでいた！

田舎で育つのもそれなりに楽しかったけど、ロンドン出身の“ノリのいいロッカーたち”なんて僕の周りにはいなかったから、彼らと一緒にいるのはすごく刺激的だった。
彼らの目的は、田舎に逃れて音楽を録音して、たくさん紅茶を飲むことだったんじゃないかな(笑)。音楽も好きだったし、彼らと一緒にいるのが楽しかった。でもまさか、その後20年も断続的に彼らの世話を焼き続けることになるなんて、当時はまったく想像もしていなかったよ。

大学進学でロンドンに出てから、ポールに「機材のセッティングやライブの手伝いをしてくれる人を探してる」と声をかけられて、より深く関わるようになったんだ。レコード会社から注目され始めた頃だったね。そこからすべてが始まって、気づけば今もこうして一緒にいる。本当にうれしいよ。また彼らが一緒に演奏している姿を見られるなんて。そして何より、音楽そのものの熱量が今もまったく衰えていないってことが、ほんとに驚くべきことだよ。

チャートに入る前のライブと、成功後のライブでは、雰囲気に違いはありましたか？

彼らが有名になる前、誰かに「何してるの？」って聞かれて「クーラ・シェイカーで働いてるよ」と答えると、たいてい「クーラ・…誰それ？どうやって書くの？」って困惑されてた。でも、それも長くは続かなかったけどね！

チャートイン前のライブでも、彼らがどこで演奏しても、いつも特別な雰囲気があった。他のどのバンドとも違ってたから。いろんなジャンルの影響を受けながらも、“メインストリームでサンスクリット語を取り入れたロック”なんて、それまで存在していなかった。でもそれを現実にしたのが、彼らだったんだ。

ブリットポップ時代は、音楽シーンとしてはちょっと不思議な時代だったけど、Kula Shakerがいつの時代に現れていたとしても、きっと注目されたはずだと思う。
チャート入りしてからも、基本的には同じで、ただすべてが“ちょっと大きく”なっただけなんだ。

初めてトップ10入りしたときは、どうやってお祝いしたんですか？

紅茶を飲んで、カレーを食べに行ったよ(笑)。

クーラ・シェイカーと一緒に体験した中で、いちばんクレイジーだったライブは？

これぞ、ぶっちぎりの「究極のクレイジー！」ってやつは思い浮かばないけど、順不同で“狂気のハイライト”をいくつか挙げてみるよ。

- 2010年、韓国のジサン・バレー・フェスティバル。湿気のせいでバンドの機材がほとんどまともに動かなくなっちゃって。でも、なんとか乗り切ったんだよね…。
- 1997年、ニューヨークのアーヴィング・プラザでのライブでは、The Presidents of the United States of Americaのクリス・バルーが飛び入りして「Knight on the Town」を演奏してくれた！（ちなみに最近、シアトルではPUSAのもう一人のオリジナル・メンバー、デイヴ・デデラーがやって来て、同じ曲を一緒に演奏したんだ）
- 1996年、Fun Lovin' Criminalsと一緒だったニューヨークでのショーケース・ライブ。ヒューイにガムをあげたら、彼が“強化版タバコ”（まあそういうことにしておこう）ってやつをくれてね…結果、ギターのチューニングはめちゃくちゃになるわ、ライブ中まったく役に立たないしで、ほんと最悪だった（笑）。後から知ったんだけど、彼って元・米海兵隊員だったんだって。そりゃタバコも強烈なわけだよね。あれ以来、ライブ前には絶対やらないって決めた。
- 実際のKula Shakerのライブじゃないけど、1997年にメンフィスでメタリカを観に行ったときのこと。ツアー名は「Poor Touring Me」で、巨大な黒いスポーツ・ピラミッド会場だった。マネージャー同士が知り合いだったから実現したんだけど、めちゃくちゃワイルドだったよ！
- これもKula Shakerのライブではないけど、1997年にニューオーリンズのバーでRebirth Brass Bandを観たときのこと。バンドもクルーもみんな踊ってた。うん、本当に“踊って”たんだ。
- 1999年、ロンドンの100クラブでのライブ中に、突然火災報知器が鳴り出したことがあった。全員（バンド、クルー、観客）で一斉に避難して、しばらく外にいたんだけど、しばらくしてからみんなまた会場に戻って、普通にライブ再開したんだ。あれは最高だったね。
- 僕とジョフのバンド「Bucky」で、何度もKula Shakerの前座を務めたことがあるんだけど、まあクレイジーだった（笑）。裏方としても忙しかったのに、前座もやるっていう。とはいえ、バンドはずっと僕たちをすごく応援してくれてたし、おかげでとても楽しいライブができたよ。

ツアー中でいちばん記憶に残っているエピソードは？

うーん、記憶力がひどくてね（笑）。たぶんホテルの屋上とか、紅茶のカップにまつわる話だった気がする。

『K』収録曲の中で、特に好きな曲はありますか？それはなぜですか？

「303」が大好きなんだ。あの曲は、ちょうど僕が彼らと知り合い始めた頃、彼らがサマセットに来ていたことについて歌ってるんだ。ロックしてるし、“道路へのラブソング”って発想もすごく好きなんだよね。

『K』の20周年ツアー（K20ツアー）をどれくらい楽しみにしていますか？ それと、ショーの内容について何か教えてもらえますか？

今年はいろんな場所でライブをやってきたけど、その締めくくりとして『K』をやれるのがすごく楽しみなんだ。とくにUKツアーはね。僕たちが始まった場所だし、バンドがすべてをスタートさせたアルバムだし。今年はバンドとクルーとのツアーが本当に楽しかったし、アメリカ公演でグレアムが一時的に戻ってきたのも、すごくうれしかった。

唯一明かせることとしては…今回も舞台袖の“ギター・ワールド”からタンバリンを叩くよ（笑）。でも今回は、『K』のアルバムジャケットに描かれてるいろんな人物に扮する予定なんだ。初日はキングコング！

“クーラ・シェイカーは あらゆる面で僕の人生を変えた。”

by Mary Nilsson

この20年間、クーラ・シェイカーのファンであれば、ステージの裏でショーを支える多くのスタッフの存在をご存じでしょう。今回はその中でも、バンドのサウンドを長年支え続けてきた音響エンジニア、Graham Pattison（グレアム・パティソン）にお話を伺うことができました。アメリカ・ツアーから戻ったばかりの彼に、バンドとの出会いや、そしてバンドの“王”が生まれ変わっていく過程で、どのように関わり続けてきたのかを語ってもらいました。

クーラ・シェイカーを長年応援しているファンは、あなたがバンドのツアーファミリーの一員だったことを覚えていると思います。最初に彼らと関わるようになった経緯を教えてください。

ロンドンのフラムにあった（今はもう無くなってしまった）小さなパブ兼クラブ『ザ・スワン』で、僕は音響エンジニアの修行中だったんだ。何日か前から、「ヘイリー・ミルズが息子のバンド“The Kays”の演奏を観に来るらしい」っていう噂が流れていてね。

当日、そのバンドがやって来たんだけど、ツアーマネージャーでありスタジオのサウンドエンジニアでもあったボビーが僕のところに来て自己紹介してくれた。そして彼が、「バンドの音をミックスしてみないか？」って言ってくれたんだ。彼はバンドの好みや要望を伝えてくれて、リハーサルの後には「友達がちょうどヒマラヤから帰ってきたんだが、外で会ってみる？」なんて言ってきたりして（笑）。

ライブはすごくうまくいって、音も良かったと思う。
…たぶん、普段よりもエフェクトをずいぶん多めに使ったせいもあっただろうけどね（笑）。
終演後、ボビーがこう言ったんだ。「来週の月曜、空いてるか？B.B.Mのブリクストン・アカデミー公演でオープニングを務めるんだけど、音響エンジニアが必要なんだ」

彼らは、当時の僕にとって“理想の音のバンド”だった。僕自身もミュージシャンだし、彼らが目指しているものがすぐに理解できた。大きなビジョンも見えていたし、僕はディレイやリバーブで彼らを“トリップさせた”んだ。あれはまさに“天国的な出会い”だったと思うよ。

バンドが再結成した後も、一緒に仕事をしていましたね。最近の活動休止について、ツアーが恋しくなったりしませんか？

クーラ・シェイカーは、僕の人生をあらゆる意味で変えてくれた存在なんだ。1999～2000年頃、クリスピアンとディナーをしたときに、バンド解散の理由を説明してくれたんだけど…正直、心が折れたよ。僕自身、みんなに対してものすごく大きな希望を抱いていたし、たとえそれが幻想だったとしても、あの時は本当にショックだった。

だから、数年後に彼から電話があって「バンドをまたやろうと思ってる」と聞かされたときは、本当にうれしかったんだ。

当時のライブでのファンの反応について覚えていることはありますか？

ファンはずっと素晴らしかったよ。年齢もスタイルもバラバラで、クリシュナ信者やヒッピー、かつての青春時代を懐かしむ方々もいて…若い人から年配の人まで、あらゆる世代が入り混じった独特な“混ざり合い”があった。

2006年の「T in the Park」フェスでは、「Hey Dude」が始まった瞬間にテントの中が一斉にジャンプし始めてさ。あれは本当に圧巻だった。

バンドの再結成前後で、音楽シーンに変化はありましたか？

90年代には、まだiPodすらなかったし、ダウンロードやストリーミングが出始めたばかりの頃だった。

だから、音楽シーンは良くも悪くも大きく変わったよね。今のようなFacebookやSpotify、Deezer、iTunes、そしてインターネット全体の存在を想像できる？
正直なところ、客観的に語るのは難しいんだ。だって、僕自身の視点もこの間に劇的に変化してしまったからさ。

ツアー中の忘れられないエピソードを一つ教えてください。特にそれが印象に残っている理由は？

うーん、語りたい話は山ほどあるけど…たとえば、ブリクストン・アカデミーでカブキ（幕）がちゃんと落ちなかった話とか、グラストンベリーで2日続けてセカンドステージとメインステージの両方に出演したこととか。もしくは、1996年にサンプルラックを泥の中でずるずる引きずって「アザー・ステージ」にたどり着いたこともあったな。

ロンドンの100クラブでライブ中に火災警報が鳴って、全員が避難したこともあったよね…。
ニール・ヤングとのツアーも忘れられない。もちろん、ツアーとは言えないような“いろいろ”な話もたくさんあるけど（笑）。

中でも特に印象に残っているのは、日本だな。日本には語りきれないほどの思い出がある。初めて訪れたときは、まるで完全に別の惑星に降り立ったような体験だった。25歳のロングヘアのリンカンシャー出身の青年には、完全に“マインドブローイング”な体験だったよ。

でも今振り返ると、一番胸に残っているのはシカゴのメトロ・クラブでライブをした日のことかもしれない。あの日、ポールがバンドやクルーに「父親になるんだ」って報告したんだよ。本当に素晴らしい一日だった。そして、何かが変わり始めているんだっていう実感があったんだ。

『K』の中で一番好きな曲は何ですか？その理由もぜひ。

「Into the Deep」だね。あの軽快なイントロと、繰り返し打ちつけるようなビートがどんどん盛り上がっていく感じが最高なんだ。そして、あのバカみたいにキャッチーで催眠的なメロディ！
先月アメリカ・ツアーから戻ってきて以来、ずっと鼻歌や口笛でこの曲を口ずさんでる（笑）。

再結成前も後もバンドと共に歩んできたあなたから見て、この20年間でバンドの音楽はどのように進化したと思いますか？

この20年で彼らは── 根本的には、あの頃と同じく素晴らしいミュージシャンたちだよ。みんなそれぞれ、音楽家としてすごく成長したと思うし、経験からくる自信に満ちてるよ。その進化はここ数作のアルバムを聴けばよくわかる。今でも彼らは“素晴らしいライブバンド”の本質を失っていないし、先月終えたアメリカ・ツアーでは信じられないほどのエネルギーを見せてくれた。

『Peasants』ツアー中の1999年、日本でのクルーメンバー。前列左から：サイモン、クリスピアン、グレアム。

最後に、あなたは多くの読者にとってもおなじみの顔だと思います。現在はどんな活動をされていますか？

バンドが1999年に解散した後、ようやく自分の音楽に打ち込む時間ができて、フランスでひっそりアルバムを出した。ありがたいことに、ポール、アロンザ、それに『Peasants』のエンジニアでもあった友人のフルトンも一緒に演奏してくれた。

2004年から2005年にかけて、フランス各地とその周辺で素晴らしいライブができた。本当に素晴らしい経験だったよ。その後はフランスに移住して、家庭を持って、音響エンジニアの仕事により深く関わるようになった。特に『David Gray』『Tindersticks』『Gomez』といったアーティストとの仕事が多かった。

…まあでも、これは僕の話じゃないね。これは『K』のリリース20周年の話だ！
こうしてその記念のために自分が文章を書いているなんて、いまだに信じられない気分だよ。

“偉大なるクーラ・シェイカー 20光年の時を超えて”

by Albert Calderon

1996年のある晩のことだった。MTVで深夜枠に放送されていた番組『120 Minutes』を、何気なく眺めていたその瞬間──まさかあの瞬間から、僕の人生が永遠に音楽によって変えられるなんて、夢にも思っていなかった。

つい昨日のことのように思い出せる。17歳だった僕は、テレビの画面に釘付けになっていた。
「Tattva」が流れ始めた瞬間、その音楽に完全に魅了されたんだ。メンバーそれぞれが、自分の楽器を完璧に操りながら、息の合った一つの生き物のように創り出す“音の革命”に心を奪われた。
この「Kula Shaker」というバンドは一体何者なんだ？
気づけば僕は、サンセット・ストリップにあった（今はもう存在しない）世界的名店タワーレコードに向かっていた。
そして、アルバム『K』を手に取った。

そこから僕とこの英国バンドとの20年にわたる、狂おしいほどの音楽的恋、または執着にも似た愛の物語が始まったんだ。この20年間、場所も人も、周囲のものも変わっていった。でもたったひとつ、変わらないものがあった。それは、クーラ・シェイカーがずっと、僕の“人生最愛のバンド”であるということだ。

彼らの音楽、特に輸入盤でしか手に入らなかったシングルたち──そこに収録された珠玉のB面曲（「Light of the Day」「Troubled Mind」「Smile」「Drop in the Sea」「Reflections of Love」「Gokula」「Dance In Your Shadow」など）は、僕の青春時代そのものを象徴している。
その音楽と共にあった美しいジャケットアートやブックレットは、僕の心に焼き付いて離れない。

『Summer Sun』EP、「Sound of Drums」のシングル、そしてアルバム『Peasants, Pigs & Astronauts』がリリースされたとき、僕の中で一つの確信が生まれた。
「このバンドにハズレなんてない！」ってね。

1997年にロサンゼルスのエル・レイ・シアターで彼らのライブを初めて観て、1999年にはマヤン・シアターでもう一度彼らに出会えた。
それは、まさに夢のような体験だった。あの頃のクーラ・シェイカーとの日々は、言葉では言い表せないほどの感情の高まりに満ちていた。創造力と希望にあふれた彼らの音楽は、新たなミレニアムへと続く光のようだった。
その時代にタイムスリップできるなら、僕は喜んでその中に閉じ込められていたいと思う。
（まさか次にクーラのライブを観るのが、17年も後になるなんて思ってもいなかったよ…。）

そして、心が引き裂かれるような別れが訪れた──
「この地球上で最高のバンド」が解散するというニュース。

それ以来、僕のクーラ・シェイカーコレクションは、より“神聖な音楽遺産”へと昇華していった。年月が流れても、僕は会う人すべてに、まるで伝道師のようにクーラの魅力を伝え続けてきた。いつか彼らが再結成することを、ただひたすら願いながら。クーラ・シェイカーの音楽は、僕の日常に欠かせない“精神的栄養”だった。そしてその存在感はむしろ年々強くなっていった。

老いが少しずつ忍び寄り、時が歴史の中へと消えていったころ──何年も前にミルズ氏が見事に紙に綴ったように、僕もまた「ただなんとなく過ごしてしまった日々」を思い返していた自分に気がつく。今ではもう過ぎ去り、記憶としてしか残っていない日々を。

新しいクーラ・シェイカーの音を求める飢えと期待は、僕の全身を包み込み、彼ら以外の何者もその渇きを癒すことはできなかった。

そして── 突然、『Strangefolk』が登場したんだ！
「Fool That I Am」や「Ol' Jack Tar」のように、胸にこびりつくように美しいメロディが鳴り響き、「Die for Love」の鋭く襲いかかるようなサウンドが、《偉大なクーラ・シェイカー》が帰ってきた！そして容赦はしない！と高らかに告げていた。

さらに続いてリリースされたのが、まさに極上の一枚、『Pilgrim's Progress』。このアルバムは、その全てが美しく、完璧で、僕と妻にとってとても特別な意味を持つ曲、「Ruby」が収録されていた。僕たちはその曲に心から魅了され、なんと娘のひとりに"Ruby"と名付けたほどだ。今でもその曲が流れると、彼女は嬉しそうにこう言うんだ── 「これ、私の曲だよ！」ってね。

そして2010年、ファンジンが主催していたプレゼント企画で、奇跡的に『Peter Pan RIP』のビデオ撮影時に撮られたバンドの直筆サイン入り写真が当たった。その写真は今でも額に入れて、本棚の一番目立つ所に飾ってある。

その後も、クーラ・シェイカーはリリースのたびに僕を驚かせ、感動させ続けている。たとえば「Slipping Away」のような過去の楽曲や、「Space Caravan」、「High in a Heaven」といったレア音源集『Lost 'N Proud』に収録された曲の数々が、そのカタログをさらに宝石のように輝かせている。

そして今年、17年越しの夢がついに叶った。彼らがついにアメリカに戻ってきてくれたんだ！
10月8日、ロサンゼルスのThe Roxyでのライブ。これは絶対に忘れられない夜になった。妻にとっては人生で

初めてのクーラ・シェイカーの生ライブ。そして僕にとっては──なんと、あのヘイリー・ミルズに会うことができた！短い会話を交わし、一緒に写真も撮らせてもらった。何より感動したのは、彼女がステージ上のバンド（つまり息子が率いるバンド）を楽しそうに、誇らしげに観ていたこと。あの夜は、本当に特別だった。

翌日は、長年の友人ジョーと一緒に、2時間かけてサンディエゴへと車を走らせた。彼らの短い『K 2.0』全米ツアーの最終公演を観るために。
「Here Come My Demons」、「33 Crows」、「Love B (With U)」── どれもライブで最高の響きだった！

あの週末に自分が感じたことを言葉で表すのはとても難しい。でも、本物のクーラ・ファンならきっとわかってくれるはずだ。
クーラ・シェイカーの音楽が僕にとってどれほど大切で、かけがえのない存在なのか── それを正確に言葉にすることなんてできない。でも、もしバンドにひとつだけ言えることがあるとすれば、それはこうだ：

「今まで本当にありがとう。君たちの音楽のおかげで、この地球で過ごす僕の人生はかけがえのないものになった。」

「そして、どんなときも僕をひとりにしなかったことに── 感謝してる。迷えるこの心を、君たちの音が僕を"家"へと導いてくれた。」

この場を借りて、ファンジンの皆さんに心から感謝したい。この素晴らしい機会をくれたこと、そしてこの記憶をみんなと共有できたこと、何よりこのファンジンをこんなにも愛すべき形で届けてくれていることに── ありがとう！

Photos : Albert Calderon

Full Gigography：全ツアー日程 1993-1996

Photos : from the band's archive

The Kays名義

1993
12月
10日　ロンドン,ホクストン/バス クレフ

1994
4月
25日　ロンドン,イズリントン/パワーハウス
26日　ロンドン,フラム/ザ・スワン

5月
24日　ロンドン/ボーダーライン
25日　ロンドン,コヴェントガーデン/ロックガーデン

6月
1日　ロンドン,ケンティッシュタウン/ブル&ゲート
11日　ロンドン,フラム/ザ・スワン
14日　ロンドン,シェパーズブッシュ/ボトムライン
22日　ロンドン,フラム/キングスヘッド

7月
19日　ロンドン,ケンティッシュタウン/ブル&ゲート

8月
6日　ロンドン,ウォーターラッツ/スプラッシュクラブ
26日　ロンドン,ウォーターラッツ/スプラッシュクラブ

10月
20日　ロンドン,ウォーターラッツ/スプラッシュクラブ
24日　ロンドン,イーリング/テムズ・バレー大学

1995
2月
7日　ロンドン,カムデンタウン/ダブリンキャッスル

3月
9日　ロンドン,ウォーターラッツ/スプラッシュクラブ
18日　ロンドン,フラム/ザ・スワン
25日　ロンドン,カムデンタウン/モナーク

4月
14日　ロンドン,ニュークロス/アマシャムアームズ

5月
25日　ロンドン,カムデンタウン/ザ・ファルコン

6月
6日　ロンドン,カムデンタウン/アンダーワールド（リーフのサポート）

Kula Shaker名義

7月
22日　ロンドン,カムデンタウン/モナーク
29日　ロンドン/スプラッシュクラブ（Hooker、Cableと共演）

8月
6日　グラストンベリー/ラティヤートラ（祭り）

9月
5日　マンチェスター/ホーリーシティ・ズー（In The City Unsigned、共同優勝）

10月
9日　ロンドン/スプラッシュクラブ（Slipstreamと共演）
19日　ロンドン/LA2（Supergrooveと共演）
26日　レディング/アリーキャット・コンプレックス

11月
1日　ロンドン/スプラッシュクラブ（Baby Bird、Laxton's Superbと共演）
16日　ロンドン/スプラッシュクラブ（Blessed Ethel、Bawlと共演）
24日　ロンドン/LA2（Jocasta、Chilium、Mad Carsonと共演）
30日　レディング/アリーキャット・コンプレックス

12月
1日　タンブリッジウェルズ/フォーラム
13日　マンチェスター大学（The Presidents of the United States of Americaのサポート）
14日　ロンドン/ガレージ（PUSAサポート）
15日　ロンドン/スプラッシュクラブ（Mini Bar、Sisterと共演）

1996
2月 UK
16日　ロンドン/アストリア（Mother Earthのサポート）

3月 ヨーロッパ
31日　ベルリン/ロフト（PUSAと共演）

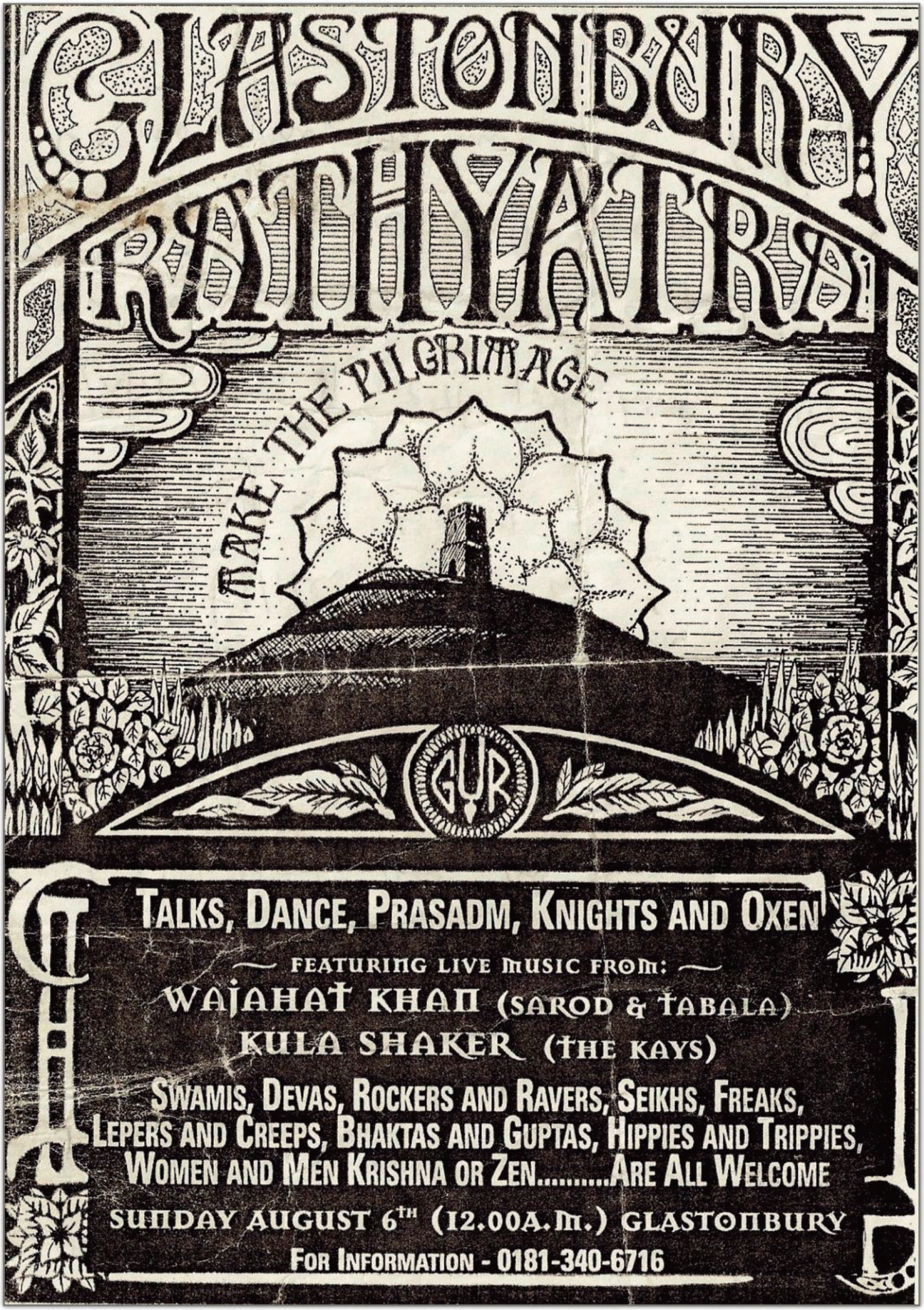
4月 ヨーロッパ
2日　ハンブルク/ロゴ（PUSAと共演）
3日　リヨン（PUSAと共演）
4日　マルセイユ（PUSAと共演）
12日　ロンドン/アストリア（PUSAと共演）
13日　ウォルヴァーハンプトン/ウルフランホール（PUSAと共演）

5月 UK
17日　チェルムスフォード/アーミー&ネイビー

18日　コヴェントリー/コリンズ・キッチン
19日　ブラックウッド/マイナーズ・インスティテュート
21日　ロンドン/100クラブ
23日　ノッティンガム/ロックシティ
24日　ミドルズブラ/アリーナ（キャンセル?）
25日　ヘイスティングス/ザ・クリプト（キャンセル?）
26日　ブライトン/ブライトン・フェスティバル
27日　ダービー/ザ・ギャリック
29日　ストーク/ザ・ステージ
31日　リバプール/ロマックス

6月 UK
1日　ウォリック/ウォリック大学
3日　エディンバラ/ヴェニュー
4日　グリノック/リコス
6日　マンチェスター/ロードハウス
7日　リーズ/ブライトン・ビーチ
8日　ヨーク/フィッバーズ
9日　シェフィールド/ザ・パーク
12日　ハル/ザ・ルーム
13日　レディング/アリーキャット
14日　タンブリッジウェルズ/フォーラム
15日　バース/モールズ

7月 UK
8日　ブリクストン・アカデミー（PUSAと共演）
14日　キンロス/T・イン・ザ・パーク
18日　ストラトフォード=アポン=エイヴォン/フェニックス・フェスティバル
30日　ハル/ザ・ルーム・ラグ
31日　バーミンガム/ザ・ファウンドリー



バンドのアーカイブより。1995年にアロンザが描いたポスター。

1996

8月 UK

2日　ロンドン/アストリア
10日　ネブワース(Oasisサポート)
16日　ミドルズブラ/アリーナ
18日　チェルムスフォード/V96
23日　ヘイスティングス/ザ・クリプト
24日　レディング・フェスティバル

9月 UK

13日　ロンドン/ウェンブリー・アリーナ
　　(Top Of The Pops)
19日　ダブリン/ミュージック・センター
20日　ベルファスト/エンパイア
23日　ノリッジ/イースト・アングリア大学
24日　ノーサンプトン/ロードメンダーズ
26日　ニューカッスル/リバーサイド
27日　グラスゴー/プラザ
28日　シェフィールド/リードミル
30日　ケンブリッジ/ジャンクション

10月 UK・ヨーロッパ

1日　ポーツマス/ピラミッド
3日　リーズ/メトロポリタン大学
4日　マンチェスター/アカデミー
5日　ウルヴァーハンプトン/ウルフラン・ホール
7日　ブリストル/ビアケラー
8日　カーディフ/大学
9日　ロンドン/キルバーン・ナショナル
18日　ケルン/ルクソール
19日　ハンブルク/ロゴ
21日　ベルリン/ロフト
22日　シュトゥットガルト/ヴィラ・ベルク
25日　ミュンヘン/バックステージ

11月 US・カナダ・日本

4日　アトランタ/コットン・クラブ
7日　ニューヨーク/アーヴィング・プラザ
8日　フィラデルフィア/ミドル・イースト
9日　ワシントンD.C./9:30クラブ
12日　ボストン/パラダイス・ロック・クラブ
14日　トロント/オペラ・ハウス
16日　シカゴ/ダブル・ドア
17日　デトロイト/7thハウス
19日　シアトル/モーズ(キャンセル)
21日　サンフランシスコ/ボトム・オブ・ザ・ヒル
22日　ウェスト・ハリウッド/ウィスキー・ア・ゴーゴー
29日　大阪/松下IMPホール

12月 日本

4日　東京/新宿リキッドルーム

1997

1月 UK

13日　ダブリン/SFX
14日　ベルファスト/アルスター・ホール
16日　マンチェスター/アポロ
17日　マンチェスター/アポロ
18日　ドンカスター/ドーム
20日　グラスゴー/バローランズ
21日　グラスゴー/バローランズ
23日　ロンドン/ブリクストン・アカデミー
24日　ロンドン/ブリクストン・アカデミー
26日　プリマス/パビリオン
27日　バーミンガム/アストン・ヴィラ・レジャー・センター
28日　レスター/デ・モントフォート・ホール

2月 US・カナダ

2日　メンフィス/616クラブ
5日　ニューオーリンズ/ハウス・オブ・ブルース
6日　ヒューストン/ナンバーズ
7日　オースティン/リバティ・ランチ
8日　ダラス/ディープ・エラム・ライブ
10日　ローレンス(カンザス)/グラナダ・シアター
11日　セントルイス/ミシシッピ・ナイツ
13日　シンシナティ/ボガーツ
14日　クリーブランド/ジ・オデオン・コンサート・クラブ
15日　ピッツバーグ/メトロポール
17日　トロント/オペラハウス
18日　モントリオール/ル・スペクトラム
19日　ボストン/アバロン

3月 ヨーロッパ・US

17日　マドリード
20日　ミュンヘン/シュラハトホフ
29日　バンクーバー/グレースランド
30日　シアトル/DV8

4月 US

1日　サンフランシスコ/ライブ105
2日　サンフランシスコ/フィルモア
3日　ロサンゼルス/エル・レイ・シアター
4日　ロサンゼルス/プロモ
5日　フェニックス/エレクトリック・ボールルーム
7日　デンバー/ブルーバード・シアター
9日　ミネアポリス/ファースト・アベニュー
10日　ミルウォーキー/モジェスカ
11日　デトロイト/セント・アンドリュース・ホール
12日　シカゴ/ザ・メトロ
14日　アトランタ/ザ・ロキシー
15日　ナッシュビル/328パフォーミング・ホール
17日　ワシントンD.C./9:30クラブ
18日　フィラデルフィア
　　/シアター・オブ・リビング・アーツ
19日　ニューヨーク/アーウィング・プラザ
20日　ニューヨーク/アーウィング・プラザ

5月 ヨーロッパ・US

8日　ヨーテボリ/スカンジナビウム
　　(エアロスミスと共演)
10日　ストックホルム/ザ・グローブ
　　(エアロスミスと共演)
12日　オスロ
　　/ザ・スペクトラム(エアロスミスと共演)
15日　ヘルシンキ/ニュー・ホール
　　(エアロスミスと共演)
17日　ニュルブルクリング/ロック・アン・リング
18日　ニュルンベルク/ロック・イン・パーク
19日　オランダ/ピンクポップ フェスティバル
20日　プラハ/スポーツ・ホール(エアロスミスと共演)
23日　ウィーン/シュタットハレ
　　(エアロスミスと共演)
25日　ミラノ/フォーラム(エアロスミスと共演)
27日　ロッテルダム/アホイ(エアロスミスと共演)
29日　ヘント/フランダース・エキスポ
　　(エアロスミスと共演)
31日　ワシントンD.C.

6月 ヨーロッパ

7日　リヨン/アレ・トニー・ガルニエ
　　(エアロスミスと共演)
9日　チューリッヒ(エアロスミスと共演)
11日　パリ/ベルシー(エアロスミスと共演)
13日　バルセロナ(キャンセル?)
14日　マドリード(キャンセル?)
24日　ヘルシンキ/タヴァスティア
26日　デンマーク/ロスキレ・フェスティバル
28日　グラストンベリー・フェスティバル

7月 ヨーロッパ・UK

11日　スイス/アウト・イン・ザ・グリーン
12日　グラスゴー/T・イン・ザ・パーク
24日　バーミンガム市交響楽団ホール
　　/インド・パキスタン独立50周年記念 クラシカル・エクストラヴァガンザ

8月US・UK・ヨーロッパ

1日　サマセット,ウィスコンシン
　　/リバーズ・エッジ(ホードツアー)
2日　トロイ,ウィスコンシン
　　/アルパイン・バレー(ホードツアー)
3日　シカゴ/ザ・ワールド(ホードツアー)
5日　シラキュース(NY)
　　/バーノン・ダウンズ(ホードツアー)
6日　ハートフォード/ザ・メドウズ(ホードツアー)
8日　ボストン/グレート・ウッズ(ホードツアー、セカンドステージ・ヘッドライナー)
9日　ボストン/グレート・ウッズ(ホードツアー、セカンドステージ・ヘッドライナー)
10日　オールバニー(NY)/SPAC(ホードツアー、セカンドステージ・ヘッドライナー)
12日　ウォントー,NY/ジョーンズ・ビーチ(ホードツアー、セカンドステージ・ヘッドライナー)
13日　バージニア/ビーチ・アンフィシアター(ホードツアー、セカンドステージ・ヘッドライナー)
16日　チェルムスフォード/V97 30
17日　リーズ/V97
22日　オランダ/ローランズ・フェスティバル
24日　サーリーズ,ティペラリー
　　/デイ・トリップ・トゥ・ティップ

1998

1月US

20日　ロサンゼルス/ヴァイパールーム

3月UK

25日　トーキー
　　/リヴィエラ・センター
26日　サウサンプトン
　　/ギルドホール
27日　ケンブリッジ
　　/コーン・エクスチェンジ
28日　カーディフ/カーディフ大学
29日　ノッティンガム/ロック・シティ

4月UK

1日　ダンディー/ケアード・ホール
2日　ニューカッスル
　　/メイフェア(キャンセル)
4日　リヴァプール
　　/ロイヤル・コート(キャンセル)
5日　リーズ/タウン&カントリー
6日　ブラックバーン
　　/キングジョージズ・ホール
8日　ウォルヴァーハンプトン
　　/シヴィック・ホール
9日　ロンドン/フォーラム
10日　ロンドン/フォーラム
12日　リヴァプール/ロイヤル・コート
13日　ニューカッスル/メイフェア

5月UK

2日　ベルファスト/ブラックアウト・フェスティバル

1999

1月 UK・ヨーロッパ

12日　バーミンガム/ファウンドリー
14日　リヴァプール/ロマックス
15日　マンチェスター/ロードハウス
16日　ポーツマス/ウェッジウッド・ルームズ
18日　パリ
22日　コペンハーゲン/パンフセット
23日　オスロ/ジョン・ディー・ロックフェラー
26日　ケルン/プライム・クラブ
27日　ハンブルク/ロゴ
29日　ブリュッセル/ラ・ボタニーク

3月 UK

2日　ロンドン/100クラブ
3日　ロンドン/100クラブ
4日　ロンドン/100クラブ
5日　ロンドン/100クラブ
10日　リーズ/タウン&カントリー
11日　ミドルズブラ/タウンホール
13日　グラスゴー/バローランズ
14日　ベルファスト/アルスター・ホール
15日　ダブリン/オリンピア
18日　ウォルヴァーハンプトン/シヴィック・ホール
19日　ブリストル/コルストン・ホール
20日　リヴァプール/ロイヤル・コート
22日　ダービー/アセンブリー・ルームズ
23日　ギルフォード/シヴィック・ホール
24日　ケンブリッジ/コーン・エクスチェンジ
26日　ロンドン/ブリクストン・アカデミー
27日　マンチェスター/アカデミー
28日　ロンドン/ケンティッシュ・タウン・フォーラム

4月 US・ヨーロッパ
3日　シカゴ/メトロ
14日　ニューヨーク/パワリー
21日　サンフランシスコ/フィルモア（キャンセル）
25日　ヘント/デ・フォールイト
26日　ティルブルフ/013
28日　デュッセルドルフ/トア3
29日　ハンブルク/ドックス

5月 ヨーロッパ
1日　コペンハーゲン/ヴェガ（キャンセル）
2日　オスロ/ロックフェラー
3日　ストックホルム/シルクス
5日　ベルリン/コロンビア・ハレ
6日　アムステルダム/パラディソ
9日　パリ/エリゼ・モンマルトル
10日　シュトゥットガルト/シアター・ハウス
11日　チューリッヒ/フォルクスハウス
13日　マドリード/サル・リヴィエラ（キャンセル）
14日　バルセロナ/ビキニ（キャンセル）
16日　モデナ/ヴォックス・クラブ
18日　ミラノ/プロパガンダ
20日　ウィーン/リブロ・ミュージック・フェスティバル（キャンセル）
21日　ニュルンベルク/ロック・イン・パーク
22日　ニュルブルクリング/ロック・アン・リング
24日　オランダ, ランドグラーフ/ピンクポップ・フェスティバル

6月 日本・UK
2日　東京/サンプラザ・ホール
4日　横浜/神奈川県民ホール
5日　東京/Zepp 東京
6日　東京/Zepp 東京
8日　名古屋/厚生年金会館
9日　大阪/Zepp大阪
10日　福岡/Zepp福岡
25日　サマセット/グラストンベリー・フェスティバル

7月 カナダ・US
5日　トロント/オペラハウス
6日　デトロイト/セント・アンドリュース・ホール
8日　ニューヨーク/アーヴィング・プラザ
9日　ボストン/カルマ・クラブ
10日　フィラデルフィア/シアター・オブ・リビング・アーツ
12日　ワシントン/9:30クラブ
14日　アトランタ/コットン・クラブ
16日　シカゴ, メトロ/スマートバー
17日　ミネアポリス/ファースト・アベニュー
19日　デンバー/ブルーバード・シアター
21日　ロサンゼルス/マヤン・シアター
23日　サンフランシスコ/フィルモア
30日　ダービー/ミュージック&エクストリーム・スポーツ・フェスティバル（キャンセル）

8月 UK・ヨーロッパ
6~8日バレンシア/ベニカシム・フェスティバル（キャンセル）
11日　グーンヒリー・ダウンズ/リザード・エクリプス・フェスティバル
21日　チェルムスフォード/V99フェスティバル
28日　ベルギー, ハッセルト/プッケルポップ・フェスティバル
29日　オランダ, ビディングハウゼン/ローランズ・フェスティバル

2005

12月 UK
12日　ロンドン/ウィートシーフ・ライトン・バザード

2006

3月 UK
11日　ミルトン・キーンズ/スノーゾーン

4月 UK
2日　コヴェントリー/コロシアム
3日　ノーザンプトン/サウンドハウス
6日　サンダーランド/マナー・クウェイ、サンダーランド大学
7日　グラスゴー/グラスゴーABC
10日　マンチェスター/マンチェスター大学 アカデミー3
11日　ノッティンガム/レスキュー・ルームズ
12日　ロンドン/キングス・カレッジ

5月 UK
8日　ブリストル/フリース
9日　リーズ/コックピット
10日　ポーツマス/ウェッジウッド・ルームズ
12日　リヴァプール/リヴァプール・アカデミー
13日　シェフィールド/プラグ
16日　ノリッジ/ウォーターフロント・イースト・アングリア大学
17日　ロンドン/スカラ
18日　オックスフォード/ゾディアック

6月 UK・日本・韓国
6日　アバディーン/カフェ・ドラムンズ
7日　エディンバラ/リキッド・ルームズ
8日　スコットランド/T・イン・ザ・パーク・フェスティバル
29日　日本/フジロック・フェスティバル（レッド・マーキー）
30日　韓国/ペンタポート・フェスティバル

8月 UK
18日　ブライトン/ストーク・アンダーグラウンド
19日　イングランド/Vフェスティバル
20日　イングランド/Vフェスティバル

9月 ヨーロッパ
10日　スペイン/パープル・ウィークエンド

2007

6月 UK
?日　ロンドン/メットバー
11日　グラスゴー/オラン・モア
12日　マンチェスター/マンチェスター大学 アカデミー3
13日　ロンドン/ホクストン・バー・アンド・グリル
15日　ロンドン/ブッシュ・ホール
16日　ブリストル/テクラ
22日　スペイン/ビルバオBBKライブ

7月 ヨーロッパ・日本
9日　ロンドン,ICA/iTunesフェスティバル
14日　スペイン, カルダス・デ・レイス/フェスティバル・クルトゥーラ・クエンテ
28日　日本/フジロック・フェスティバル（グリーン・ステージ）

8月 ヨーロッパ
9日　スペイン, ヒホン/プラザ・マヨール
13日　ロンドン/カーゴ
18日　ノルウェー, スタヴァンゲル/パルピット・ロック・フェスティバル

9月 UK
25日　ロンドン/ソーホー・リヴュー・バー（ティスカリ・ショーケース）
26日　ノッティンガム/レスキュー・ルーム
27日　ロンドン/ウォーター・ラッツ
30日　サウサンプトン/サウサンプトン大学

10月 UK・ヨーロッパ
1日　リヴァプール/アカデミー2
2日　シェフィールド/ザ・リードミル
4日　グラスゴー/QMU
5日　ニューカッスル/ノーザンブリア大学 ステージ2

6日　マンチェスター/
　　ユニバーシティ・アカデミー2
8日　ウォルヴァーハンプトン/ウルフラン
9日　ケンブリッジ/ザ・ジャンクション
10日　ロンドン/ココ
16日　オランダ, アムステルダム
　　/メルクウェグ
17日　ドイツ, ケルン/プライム・クラブ
19日　イタリア, ミラノ/レインボー
20日　イタリア, ローマ/
　　チルコロ・デッリ・アルティスティ
21日　イタリア, ラヴェンナ/ブロンソン
22日　ドイツ, ミュンヘン
　　/アトミック・カフェ
24日　ドイツ, ベルリン/リド
25日　ドイツ, ハンブルク
　　/グリューンシュパン
26日　ベルギー, ブリュッセル
　　/ロトンデ

11月 UK・ヨーロッパ
22日　オランダ, デン・ハーグ
　　/クロッシング・ボーダー
24日　レスター/レスター大学

2008

1月 日本・UK
16日　東京, 恵比寿/リキッドルーム
17日　東京, 渋谷/渋谷AX
20日　名古屋/クラブクアトロ
21日　大阪/ビッグキャット
22日　東京, 恵比寿/リキッドルーム
27日　ウォリントン/パー・ホール
28日　アバディーン/モシュルー
29日　ダンディー/ファット・サムズ
30日　エディンバラ/マルトリーズ・ウォーク
　　(Xfmスコットランド・ギグ)
30日　エディンバラ/リキッド・ルームズ

1月 UK・ヨーロッパ
4日　エクセター/レモン・グローブ
5日　ブリストル/アンソン・ルームズ
6日　ノリッジ/ウォーターフロント
8日　ロンドン/シェパーズ・ブッシュ・エンパイア
9日　バーミンガム/カーリング・アカデミー2
18日　ベルギー, ブリュッセル/オランジュリー
19日　オランダ,ユトレヒト/ティヴォリ
21日　ドイツ, ミュンヘン
　　/クライナー・エルサーハレ
22日　イタリア, ボローニャ/エストラゴン
23日　イタリア, トリノ/オッシジェーノ
25日　ドイツ, フランクフルト/バッチカップ
26日　ドイツ, ケルン/シュトルヴェルク
28日　オランダ, フローニンゲン
　　/ウースターポールト

3月 UK・ヨーロッパ
1日　ドイツ/ハルダーン・ポップ・フェスティバル
2日　オランダ, アイントホーフェン/エッフェナー
3日　ドイツ, ザールブリュッケン/ロキシー
4日　オランダ, ナイメーヘン/ドーンロースヘ

5月 ヨーロッパ
5日　オランダ, ハールレム
　　/ベフライディングス・ポップ

6月 ヨーロッパ
20日　スペイン, ロルキ/ムルシア・サウンド
29日　オランダ, デン・ハーグ/パークポップ2008

7月 UK
5日　ギルフォード/ストーク・パーク
　　(ギルフェスト2008)

8月 ヨーロッパ
8日　ドイツ, ハルダーン
　　/ハルダーン・ポップ・フェスティバル
15日　スペイン,アルメリア・エル・アヒード/
　　オラ!フェスティバル

2009

4月 ロシア
2日　モスクワ/B-2
4日　サンクトペテルブルク/ザ・ウェイティング・ルーム

8月 ヨーロッパ・UK
8日　イタリア,
　　カステルブオーノ
　　/イプシグロック・フェスティバル
28日　ウェスト・カンブリア
　　/ソルフェスト2009 UK

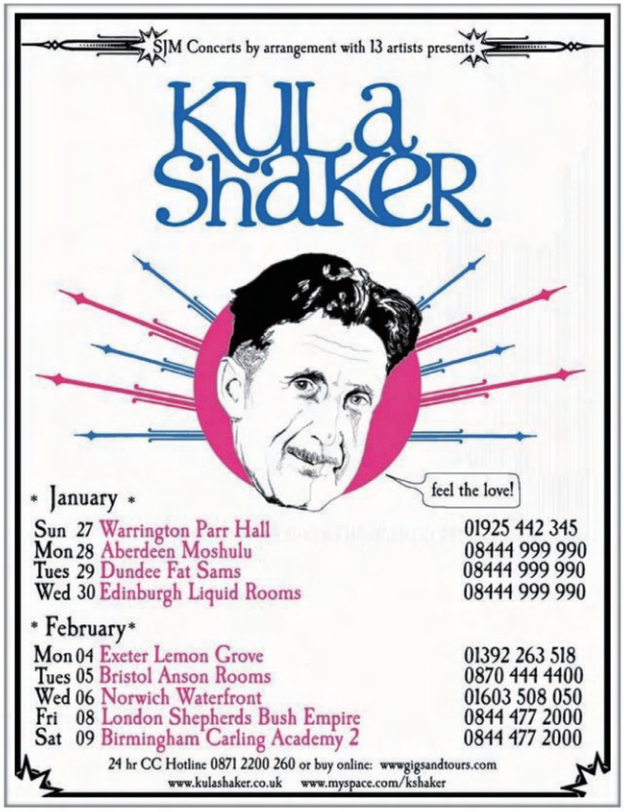
2010

7月 アフリカ・UK
5日　ソマリア/モガディシュ・ミュージック・フェスティバル
8日　ロンドン/ザ・リレントレス・ガレージ

7月 東アジア
27日　台北/トゥインクル・ロック・フェスティバル
31日　日本/フジロック・フェスティバル

2010

8月 アジア
1日　韓国/チサン・バレー・ロック・フェスティバル
5日　クアラルンプール/KLライブ
6日　ジャカルタ/ABCメガスポーツ
　　(スナヤンGBK・バスケットコート)
7日　香港/アジアワールド・アリーナ



2016

2月 UK・ヨーロッパ

13日　ワージング／パビリオン・シアター
15日　グラスゴー／O2 ABC
16日　マンチェスター／リッツ
17日　ロンドン／ラウンドハウス
18日　ブリュッセル／ABクラブ
21日　アムステルダム／パラディソ
22日　ベルリン／ハイマトハーフェン
23日　ミュンヘン／フライハイズ
25日　ミラノ／アルカトラズ
26日　ローマ／オリオン・クラブ

3月 ロシア・ヨーロッパ

3日　モスクワ／ヨタスペース
4日　サンクトペテルブルク／グラヴクラブ
8日　パリ, ゴンザイ／マロキナリー

5月 UK+アイルランド

5日　ダブリン／アカデミー
6日　ベルファスト／ライムライト
7日　リムリック／ドランズ
9日　ホルムファース／ピクチャードローム
11日　サウスエンド／パレス・シアター
12日　バース／コメディア
13日　グロスター／ギルドホール
15日　エディンバラ／リキッド・ルームズ
17日　ロンドン／ウィルトンズ・ミュージック・ホール
18日　ロンドン／ウィルトンズ・ミュージック・ホール
20日　ウィンチェスター／ギルドホール

3月 ヨーロッパ・東アジア

2日　スペイン／ヴィダ・フェスティバル
14日　フィレンツェ
　　／アンフィテアトロ・デッレ・カスキネ
15日　ローマ／ヴィッラ・アダ
16日　リミニ／ヴェルッキオ・フェスティバル
23日　日本／フジロック・フェスティバル
22~24日
韓国／ジサン・バレー・ロック・フェスティバル
29~31日
台湾／スーパー・スリッパ・ミュージック・フェスティバル

8月 ヨーロッパ

11~14日
スペイン／ソノラマ・リベラ・フェスティバル
12~14日
スペイン／V・デ・ヴァラレス・フェスティバル
12~14日
イタリア／AMAミュージック・フェスティバル

8月 US

26日　ボストン／ブライトン・ミュージック・ホール
27日　フィラデルフィア／ワールド・カフェ
29日　ブルックリン／ラフ・トレード
30日　ブルックリン／ラフ・トレード

10月 US

2日　ワシントンDC
　　／Uストリート・ミュージック・ホール
4日　シアトル／クロコダイル
5日　ポートランド／スター・シアター
7日　サンフランシスコ
　　／グレート・アメリカン・ミュージック・ホール
8日　ロサンゼルス／ロキシー
9日　サンディエゴ／ベリー・アップ

11月 ヨーロッパ・日本

3日　ユトレヒト／ティボリフレーデンブルグ
5日　ドイツ
　　／ローリング・ストーン・ウィークエンダー
6日　ケルン／グロリア
7日　フランクフルト／バッチカップ
21日　東京／Zepp ダイバーシティ
22日　東京／リキッド・ルーム
24日　大阪／なんばhatch

『Kompedium』 究極の記念アーカイブ集 『K』3枚組アナログ盤 ボックスセット

LP1：Live in the East (End)

2016年5月17日・18日
ロンドンのWiltons Music Hallでのライブ録音

A1.　RADHE RADHE / HEY DUDE
A2.　GRATEFUL WHEN YOU´RE DEAD
A3.　JERRY WAS THERE
A4.　TEMPLE OF EVERLASTING LIGHT
A5.　INFINITE SUN
A6.　303
B1.　SMART DOGS
B2.　TATTVA
B3.　HUSH
B4.　GOVINDA

LP2：K 2.0 デラックス版

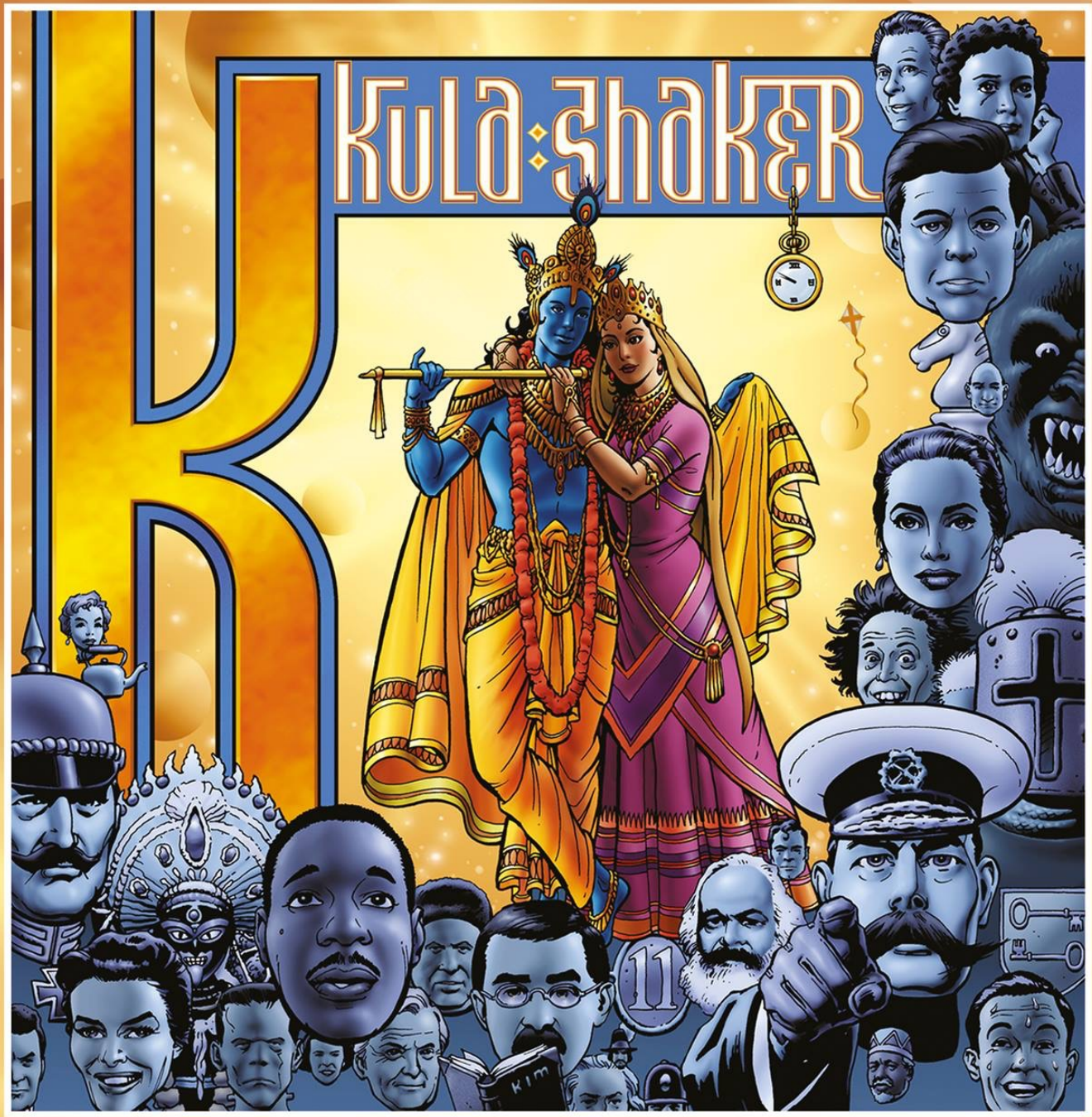
「2 Styx」と「Let Love be (With U)」の
シングルバージョン収録

A1.　INFINITE SUN
A2.　HOLY FLAME
A3.　DEATH OF DEMOCRACY
A4.　LET LOVE BE (WITH U)
A5.　HERE COME MY DEMONS
A6.　33 CROWS
B1.　OH MARY
B2.　HIGH NOON
B3.　HARI BOL (THE SWEETEST SWEET)" B4. GET RIGHT GET READY
B5.　MOUNTAIN LIFTER
B6.　2 STYX

LP3：K 20周年記念リマスター版

A1.　Hey Dude
A2.　Knight On the Town
A3.　Temple of Everlasting Light
A4.　Govinda
A5.　Smart Dogs
A6.　Magic Theatre
A7.　Into the Deep
B1.　Sleeping Jiva
B2.　Tattva
B3.　Grateful When You're Dead / Jerry Was There
B4.　303
B5.　Start All Over
B6.　Hollow Man (Pts. 1 & 2)

FAN ART - BY PETER BRUCE
K



CELEBRATING 20 YEARS OF K

PERFORMING K IN ITS ENTIRETY FOR THE FIRST TIME

DECEMBER

THU	01	OXFORD O_2 ACADEMY
FRI	02	BOURNEMOUTH O_2 ACADEMY
SAT	03	NOTTINGHAM ROCK CITY
MON	05	NORWICH THE NICK RAYNS LCR, UEA
TUE	06	GUILDFORD G LIVE
THU	08	LONDON O_2 FORUM KENTISH TOWN
FRI	09	LONDON O_2 EXTRA DATE ADDED FORUM KENTISH TOWN
SAT	10	MANCHESTER ALBERT HALL
MON	12	BIRMINGHAM O_2 INSTITUTE
TUES	13	BRISTOL O_2 ACADEMY
WED	14	LIVERPOOL O_2 ACADEMY
FRI	16	NEWCASTLE O_2 ACADEMY
SAT	17	LEEDS O_2 ACADEMY
SUN	18	GLASGOW O_2 ABC

THE ALBUM K2.0 IS OUT NOW

K2.0

GIGSANDTOURS.COM | TICKETMASTER.CO.UK

An SJM Concerts presentation by arrangement with ITB